

賀茂季鷹和歌集

季鷹遺文集補遺

高橋貞一編

○伊豆の道草の序

赤井のうしのひとゝせあたみのゆあみにまかり給ひしをりの道行ふりとして見せ給ふるを珍ら
かにおほえて先ひらきたるにはやうすかはらのまさとしのかきおきたることうち見る我さえ
にまつ旅心地せらるゝはやそもく道行ふりしるしゝ事かの貫之のあその土左日記を水上に
て此道のなかれをくむ人くれ竹の世々にたえずなんあるされとなかれてのはてくはふみか
くことも言さへくからひたる言などうちましへつゝかけまくもかしこきあか すめら御國の
ふるき手ふりにはみなもとといとゝほくなん成にたり今此ひとゝちをみるにあし曳の山のたゝ
すまひわたつみのふかきみるめはさらにて賤山かつあまの子などのものいひよとなまれるを
もそかまゝにしるし給ふれば旅心地せらるゝもうへならすやこたひある人のこひてあつさに
えりなんとすれはすかの根のねもころに見て難波のよしあしをもへたてなくきこえよはたお
くにまれはしにまれことをそへてよとせちにの給はすれとおのれ季たから谷川のえのほそく
あさきこゝろもて山井の水のそこひはからんはおほわたしらぬいさらぬのかはつにひとしく
なかゝに人わらへならんわさそとて稲舟のいなひたれと惟しはのしひての給はするもかた
しけなくていさゝか筆をうるほし侍るにこそあめあきらけき辰のとしみな月のはての五日に
かもの季鷹しるす 後藤直衛書 印 四

○以文會尚齒會詩歌集 一冊

(文政十三年三月二十一日、東山碧雲樓にて行つた尚齒會の詩歌集、季鷹の序文)

尚齒會の故よしは久米の翁のつはらにしろされにたれば更にいはす寛永の比東の日枝の宮公
辨親王に常に参りつかふまつれる人の中に七十あまりの翁に法師をましへ七人に御茶を賜ふ
とて御かへに

物皆はあたらしきよし只人はふりぬるそ是しかるへき

てふ萬葉集の歌を御手つかから書せ給しを掛させたまひうつは物は御釜を始ことくあたらし
きに物皆はとしるし給て御茶たまひをり七人に分ちたまひしをりの御花筒に花をさして彼
山なる大慈院僧都茶をたてゝ眞傳はれる故よしを語られしを思ふに我はたち餘りつ事になん
是はまたく尚齒會によらせ給ひし成へし抑昔度々行はれし中に我遠つ祖なる重保縣主のをり
の事は古今著聞集に見えたれとつはらなる事はしりかたくなんざるを季鷹八十までながらへ
て今日のむしろにつらなれる思ふに春田のかへすくこよろきの磯のよろこひはつかみしか
き筆には筑石のうみのつくしかたくなむされは

徒に老し八十のなけきをも花の木陰にけふは忘れつ 正四位下賀茂季鷹

清輔朝臣の尚齒會のためしおぼゆる花のむしろにつらなり侍て 賀茂季鷹

年浪のよるはすへなし心をもはになし筒いさや遊はむ

は し が き

賀茂季鷹は國學者としては見るべきものは少いが、歌人としては多くの歌を残して居り、江戸末期における活躍は注目すべき人であろう。代表的歌集は、「雲錦翁歌集」四冊で、五九七首を収め、前三冊は季鷹自筆の版下である。出版は序文によれば、季鷹が八十歳に近くなつた由が見え、天保二年三月末の長治祐義の語によつて、天保二年三月以後、季鷹七十八歳以後といふべきであろう。文政三年版が學習院大學にあると國書總目録にあるが誤りがあるか。天保二年版は靜嘉堂文庫、京都大學等により、刊行不明の版本が筆者藏本（阿波國文庫舊藏）を始め、かなり殘存する。國歌大系本は文字を改めてあるので本書では原本のままとする。次は、「みあれの百くさ」で、百首を撰んだものであるが（九九首）、季鷹の代表的な歌を示すといえよう。その他として、ここに加えたものは、天保三年辰、四年巳、五年午の三年にわたる歌稿、二六二首がある。香川大學神原文庫藏本である。香川大學圖書館の御配慮に感謝申しあげる。この外に諸書に引用せられた季鷹の歌があるがその數は少い。歌の特質については、國歌大系の雲錦翁歌集の解説に、山岸徳平先生が、

其の歌風は涌蓮などに類した堂上風のものが多い。（例歌略）これらは稍本歌取に近い技巧であるが、此の如き詠の少なくないのを見ても、彼の歌風を大體推察する事が出来る。古今集等を目標とする堂上風の調となつて、技巧的の方面は見るべしとするも、單に部分的の修

飾の如きもので、それによつて却つて一首の生命力を薄弱にする嫌ひ無きにしもあらぬものである。要するに全體の生命が、部分的裝飾の犠牲となる傾向のものを認めざるを得ない。蓋しこれは堂上風の一般の習慣であるかも知れない。然し中には堂上風の歌に見えない境地を歌つたものも見えて居る。

巢だちせぬ軒の雀を捕り飼ふとあなかも騒ぐ里のうなぬ子

少女子が扇の風に靡きつゝなか／＼高く行く螢かな

この外に、

縁そふ籬の竹の茂みより風の見せたる月の涼しさ

(他は略) 要するに知的な歌が多い。従つて叙景の歌も説明に傾く點はあるが、抒情的の歌には技巧の知的聰明を見せたものが少くない。此の上に於て戀や賀等の歌に出色のものがある。

見せばやな人の心の秋風にあへず亂るゝ袖の夕露

戀ひわびてはれぬ心のうき雲は夕に歸る山だにもなし

言の葉も散り失せぬのみか萬代の聲も常盤の園の松風

と述べられた。季鷹が明和二年六月有栖川宮の侍となつて歌道にはげみ、同六年有栖川宮の薨去により御暇を賜わり、明和九年正月十九歳で江戸に下るまで、京都にあつた期間、堂上家の歌風に親しんだと思われる。そして彼の歌の骨格もこの時代になつたのではないだろうか。江

戸に下つてからは、賀茂眞淵は既になく、加藤千蔭や村田春海などに交つて、千蔭や春海などの歌風になずんだといえよう。それは古今集を基盤として歌才をみがくことであつた。歌人の天分の上に詩情を見出すことではなくて、努めて傳統の中にあつて歌境を身につけることであつた。従つて知的技巧が目立つのである。萬葉類句を編んで萬葉集の秀歌に接しながらも、萬葉歌調を學びとろうとしなかつたのも、堂上風の歌の影響であらう。季鷹の歌の中に萬葉集の歌の影響もあり、古今集の歌の模倣もあるが、用語の巧みな點がその特質であらうか。

雲錦翁家集 一

大御國の言葉廻道は千波破神代より今のをつゝに玉か
豆羅絶る事なく傳へ來て掛まくも恐き大御代の御稜威
とゝもに彌榮にさかえにけり其しらべは時代の移り行
まに／＼すがたもこゝろもうつろひ行こそ此道のあや
に奇しきさちになむありけるしかうつろひ行中に古に
よきことの今の世に廢れたることすくなからずまたい
にしへ調はざることのいまのよにとりよろへる事なき
にしもあらず其けぢめをうまくあちはひ歌によみ盡し
給へるは吾師賀茂季鷹縣主にこそありけれ大人いとほ
やくより言まくもゆゝき竹の御園生にわけいらせ給ひ
またあづまの大城のもとに住給ひてはなにがし久れが
しの國しらせ給ふ君をはじめ風流の道にこゝろよせし
かぎりを友としたまひ中ごろかへりのぼらせ給ひては
大神に仕へたまふ物からいとまあれば石上ふるき世の
書をめかれ給はずひたぶるに花紅葉を遊びかたきとし

たまひてかくれがに芳野龍田の花もみちをうつしうゑ
て雲錦亭と名づけて見そなはしきこしめす事ども残る
くまなくよみ出させ給ふをいとやんごとなき御わたり
に聞しめしあげさせ給ひ天さかるひなのしづのをみや
まの奥の杣人遠き島の浦々にあさりする海士が子等に
至るまで言葉の道びきせさせ給へば四ツの時あした夕
にとひまつる人樛木の彌繼々に絶るまなくして古も稀
なりといふ御齡もまさきく過させ給ひ今は八十にさへ
ちかくならせたまひいよゝますゝ奈良の小河の水上
清く涌出るがごとよどまぬみやびのながれをくむをし
へ子のともたれかはよろこばざらめやあふがざらめや
しかはあれどひなに住おのがどちは御歌のはやしまつ
ばらなるすがたをしも見つくさざるをあかぬあまりす
ぎにし年家集撰びたまはん事をねぎ侍りしがそはきは
ことなる御わたりにこそあらめおほよそ人は我賀茂河
のさゞら波たちかへりて後瀬山のちのもどきを得る中
だちぞかしとゆるし給はざりしをしかねぎ侍りしおの

れきへ今はとし老にたればことし如月の末にまゐりて
 せちにねぎはべりければしかすがにあはれとやおもほ
 しけんふるき歌袋をふたつみつとうでさせ給ひこれら
 が中なるをいさゝむら竹いさゝかはとあたへ給ふを嬉
 しみふどころにして六條わたりの旅やかたにかへりく
 りかへし侍れどすみなれし我山の井の淺きこゝろには
 くみわけかねつることどもさはなれどいたづらに月日
 を經なんもかつはかしこかればとみに寫しを倍侍りて
 櫻木にのぼしゝはその神山の花の雲紅葉の錦たちかさ
 ねたる色をも香をも内日刺都にさかれるまなびこのは
 らからの君たちにとくもらさまほしきあまりになんか
 くいふは天保二年やよひのすゑ

播磨國赤穂の郡山里廻長治祐義

雲錦集 卷一

春歌

年内立春

1 くはゝれる月だにあるを一年にたらずて春のいかで
 立らん

元日

2 吳竹の一夜ながらも去年といひことしといへばはる
 けかりけり

3 身につむと惜みし年のきのふには心かはれる今朝の
 春哉

4 霞たち梅薫りけり久かたの月雪花のみつのはじめに

春の始社頭に侍るほど霞の降けるに

5 皇神の御前の春の始には霰の玉をしきそへてけり

江戸に有しころ京なる父のもとより初春の文の

おくに あらたなるやどをもとめて豊なるはる

をむかふる心をぞおもふと有しかば

6 ひとしほの色そふ松の言葉にあえつゝ千世の春をか
 ぞへん

若水を結ぶとて

7 わか水に老も若がへるこゝちして千代の契を結び添

でき

春從東到

8 春の來るかたをしらめや相坂の關の杉むら霞そめず
ば

春到管絃中

9 糸竹の名におふ春の庭に來て千代をしらぶる鶯の聲

子日

10 子日していはふ二葉の姫小松いづこにこもる千歲な
らん

11 窓のうちにやしなふ子等を初春のはつねならでは野

べに見ましや

ねきごとありける正月九日さわらびにそへて濱

田殿の御もとに

12 雪きえぬ松の木陰にもえそめて春待色を君に見せば

や

都霞

13 もゝしぎの大宮人の神かけて霞む都の山靜なり

賀茂季鷹和歌集

海邊霞

14 須磨あかし霞こめける沖津浪たゞこゝもとに音ばかりして

野徑霞

15 うちわたす遠方人を見ずもあらず見もせず霞む春の
野べ哉

春のあした山を望て

16 春の夜は明てし後も山端にわかれぬ雲や霞なるらむ

霞のうちの瀧をのぞむ

17 春霞立かくせ共瀧の音のいやまされるや雪消成らん

春日望山

18 朝日さす愛宕の高嶺雪消てかへり見すれば霞む大ひ

え

19 やぶしわかぬ春の光に北南霞そめけり生駒おほ日枝

野外春望

20 あしびぎの山畑そばのくぬ木原それも春にはもれぬ

色哉

鶯出谷

21 梅が香や谷のと深くさそひけん雪のふる巢を出る鶯

22 雪消ぬたにの古巢を鶯のうち出る聲も春の初花

南枝暖待鶯

23 梅がいは枝をわきてもにほひけり鶯さそへ園のはる

風

山里にうぐひすなく

24 春ぞとて谷の古巢を出ぬまに世はうぐひすとしらせ

てし哉

梅近聞鶯

25 鶯の聲のにほひも梅がゝにそへてふきいるゝ窓の春

風

梅をかざして鶯をきく

26 折かざすかしらの雪に鶯もいづれを梅とまどひてや

鳴

東風暖入簾

27 梅がゝも薫あひつゝ空だきの烟なびかすをすの春か

せ

初午稻荷まうで

28 をりにあふ馬は麓にのりすてゝかちゆ分入杉の下道

氷解

29 こほりぬし池の心も春風にうちとけゝらしよするさ

なみ

賭弓

30 鞆の音も雲井に高く聞ゆなり今や宮人眞弓ひくらん

春雪のふりけるに

31 さらにまたふるとはすれどふるとしの雪を残して消

るあは雪

二月雪落衣

32 春風に散來る梅の花と見てつゝめば袖に消るしら雪

社頭梅

33 神垣にねふり催すはふり子もおどろくばかり薫る梅

が香

曉更梅

34 玉簾あぐるもしらぬ枕よりあとよりかをる窓の梅が

月前梅

35 うめがゝのかをらざりせば窓のうちにまだ影寒き月

を入めや

梅盛

36 北南枝をわきしはきのふにて西に東に薫る梅が香

37 梅の花今盛なり鶯のひとくと鳴もをりに社よれ

38 梅の花盛に都より人のとひ來れりければ

39 かくれすむ心もしらで梅がゝや遠く都の人さそひけ

らん

40 咲ぬとは告ぬ物から梅の花こてふにゝたる風やふき

けむ

氷のほとりに梅花さけり

41 行水にうつろふ岸の梅が枝は浪の花にも香をやかす

らん

山ざとに梅の花ある所

42 梅がゝのかくにほふとも鶯はしらで山路やとく出に

けん

富小路三位貞直卿にとめこかじと名におへる梅

をまゐらすとて結付たりし

43 どめ來べきやどにしさかば梅の花をらでも君をまた

まし物を

御かべし 手折つる花にこそしれ梅の名のとめ

こかしてふ君がこゝろを

妙法院宮に始てめされて春風先發苑中梅といふ

御題を賜はれるに此宮は古風を好ませ給ひけれ

ばよみて奉れる

44 ごと木にもほひをうつせ梅がゝを昔にかへす園の

春風

田かへす所梅花散れり

45 春風に散ども梅の花を根にかへすはをしき賤が小山

田

春曙

45 わすれめや月も残りて梅がゝの霞に薫る春のあけ
の

吾妻に住しころ彌生ばかり敬子がなりどころに
て

46 一夜寝しゆかりわすれぬ色なれやすみれさく野の春
の曙

甲斐國八景のうち夢山春曙

47 面影は猶残りけりこしがたを見し夢山のはるのあけ
ぼの

あらたうところ

48 民すらも畔を譲ていにしへの聖の御代にかへす荒小

田

柳糸縁新

49 梓弓はる来る色は青柳のいどによりてぞまつしられ
ける

水邊柳

50 くりかへし見れ共あかず河水に浪のあやおる青柳の

糸

樵路早蕨

51 歸るさの眞柴を重みやすらふと見れば木陰に手折る

早蕨

わらびを折て人のもとに

52 初蕨はつかながらもこゝろざし深き山路に手折てぞ
來し

春月

53 佐保姫の霞の袖につゝみてもにほひこぼるゝ春の夜
の月

浦春月

54 なにはがたなきたる浪に春の夜は霞むや月の光なる
らん

夜春雨

55 薫り来るすきまの風の梅がゝもしめるにしるきよは
の春雨

妙法院宮にまゐりてよみて奉れる三首の歌の中

に庵春雨

36 袖にしも露かけてけり昔しのぶ草のいほりのよはの

春雨

春風

57 さそはずばいかでしらまし芳野山風社花のにほひな

りけれ

雨中待花

58 いたづらにそぐ野山の春雨を櫻一木に降らせてし

哉

尋花

59 麓より花とまがへて分入し山のかひなき春のしら雪

櫻

60 うべしこそ櫻は花の君なれや天つ霞を衣笠にせり

岡崎の蘆庵をとひて

61 言葉の花にも春はあくがれて柴の戸たゞ我などが

めそ

かへし 花をとふ君には見せじよもぎふの霜の

ふる葉は色わきもなし

依花客來

62 花にとふ人を忘れて柴の戸のあるじ顔する我ぞあや

なき

63 むれ来るをあたら櫻のとがぞとも思ひなされぬ花の

色哉

花下逢故人

64 春霞よそに隔てし年月の恨も花にのこらざりけり

關花

65 すまの浦や關路吹こす春風にこえぬ袂も花ぞ薫れる

山花

66 櫻花さきそめしよりしら雲もいゆきはゝかるみよし

のゝ山

67 よしの山花の盛になりぬめり色かはり行峰のしら雲

山花盛

68 嶺ふもと咲みちぬらしけさ見れば花のかたへのみや

ま木もなし

花見に芳野にまかりしとき

69 みよしのゝよしや雲とはまがふ共雪となちりそ山ぞ

くらばな

70 芳野山花散にけりいざ出ん世を憂しとしもおもほへ

ぬ身は

うつし植し吉野の櫻の花盛のころ都人これかれ

見に來りし時よめる

71 暮ゆかばとまりとまらぬ稀人の心を花にまかせてを

見ん

家に花の宴しける時山家花の心を人々よめりし

に

72 都人たえずとふべく櫻花散てもまがへ峰のしら雲

花のころ風のやまひになやみて

73 思ひきや待こし庭の花をおきて我身に風を厭ふべし

とは

花見に嵐山にまかりて往昔

龜山法皇の植させ給ひし事をかしこみ奉て

74 萬代のたまものなれや龜の尾の山にむかへるやま櫻

花

嵐の山の櫻咲ころといふ下句にて人々歌よみし

に

75 都人心を空になしてけりあらしの山のさくらさくこ

ろ

小田原侍從殿によりてまみらせし歌の中に足柄

山

76 あしがらの八重山櫻咲しよりふじの嶺をだにかへり

見もせず

やよひばかり經茂縣主にいざなはれて岩倉の花

見にまかりける家づとに折し一枝に添て書博士

保考縣主のもとに

77 思どちそこともいはずあくがれし春の山路の家づと

ぞ是

かへしせどう歌 玉くしげふたゝびたまふ家づ

との花過し日に見しにもまさるにほひなりけり

双林寺花月庵に日くらし花を見て

78 くれぬとて歸らん物か名におへる月と花との春の山里

うるはしき八重櫻に添て同じ寺の崇順法師ぬ
しなくてくちぬる軒に咲ながら花は昔をわすれ
ざりけりとありしかへし

79 住すてしきほやつさぬ花の色に植けん人を思ひ社
やれ

孝子のもとより花見にまからんの心は有ながら
え出たゝぬなどきこえしかへり櫻の大きな枝
につけて

80 櫻花ものいはませばかくばかりにほふをとほぬ人や
うらみむ

文子がもとより櫻の花をゝりておこせたるに歌
のそはざりければ

81 あかぬ此梢をよきて言葉の花をや風のまづさそひけ
ん

とかきてやりけるをりに水江信説名主明俊など

かたはらに居合て明俊の乞まゝに書てやりたり
けるを信説のうばひたるをもしらで歸りてまた

の日明俊がもとよりたちかへりて後ふつに見え
侍らねばとて 玉くしげふたゝび君がことの葉
の花をも風や吹さそひけむとあるにまたいひや
りける

82 しら浪のみぎはに近くよりこずばかゝること葉の花
を見ましや

小川布淑始てとひ來て後 神山の春の霞はつゝ
め共おぼろげならず見ゆる花哉といひおこせし
かへし

83 春さればめのうちつけに神山の雲をも花と見やまが
へけん

志賀山越

84 櫻ちる志賀の山路は薫る雪にはへる雲をふむこゝち
せり

隣家の櫻のちるを見て

85 散花はぬしだにえしもとゞめぬをよそに心をなぞく

だくらん

落花隨風

86 山風のたゆめばをやむしろ雪と見ゆるは花の散にぞ

りける

橋邊落花

87 散うつむまゝのつきはしつぎて見ん花の白雪消がて

にせよ

田かへす所花散たり

88 賤のをに似げなき花の衣手を風のきせたる春の小山

田

苗代水に花の散うかべる處

89 水にすむ蛙も花に聲すなり櫻ながるゝ小田のなはし

ろ

花ちれる木陰に若かへでのみちたるを折て女

のもとにといふ題にて

90 さけばかつうつろふ人の花心かへでは色に出て見せ

けり

三月の末小野篤雄が山里びたる家居に花もうつ

ろひがたに成にたればけふあす過さでなどいひ

おこせけるにみの笠取て行て終日花を惜みてよ

める

91 をやみなく櫻にそゝぐ春雨やをしむ涙も添て降らん

柿本影供に花飛如錦といふ心を

92 散と見て歸る山路や憂からまし花の錦を風しきせず

ば

三月三日

93 ことゝはぬ花のこかげに三千歳の春をくみしるけふ

の盃

富小路殿の京極の家に三月三日まみりけるに簾

中に琴ひくを聞て

94 たをやめの聲のしらべも花の名ももゝのこび有軒の

妻ごと

菅原雪臣が娘の初ひゝなをいはひて桃の花に添

て

95 あひに逢ひなの籬の桃の花もゝちの春をかけて手折

き

川のほとりに山吹さきたるかたに歌よめと十重

子がこへるに

96 うちよする浪の花さへくちなしの色にゝほへる岸の

山吹

江戸にすみし頃やよひの末二三人かいつれてあ

すか山わたり花見に出たるかへさに金杉とい

へるわたりのあやしの塙根に山吹のさき亂れた

るをこひて家づとに手折けるに道行人たちどま

りていかで其一枝えさせよといふにやすき事と

てやりけるをこよなう悦ていづこの誰人にかお

はすなどいひければよみて遣しける

97 たれとしもいかでかいはむ口なしの色にゝほへる山

吹の花

小濱殿に仕る水江信説が庭の山吹見にこよとい

ひしに行て見て

98 やまぶきの花色衣きて見れば詣いひしらぬにほひ也

けり

雨ふりける日橘千蔭より海棠の花に添て

降すさぶ雨もいとではでけふはわがいたうぬれつ

ゝをりし花なりとて贈しかへし山吹に結び付て

99 君がいたうぬれて折つと聞かからにいやはなかゝ口

なしにして

歸雁

100 いそぐらむ心もしらで月花にかこち馴たる春の鴈が

ね

妙法院宮にまゐりてよみて奉れる三首の歌の中

春曙雁

101 花鳥の色音かすめる曙にかへり見もせて鴈の行らん

暮天歸鴈

102 やよや鴈花なき里に住ぬ共見捨ん空の月の影かは

曉歸鴈

103 花にうき別見じとや霞む夜の曉かけて雁は行らん

遅日

104 櫻花散てし後ぞ春の日をのどけき物と思ひ知ぬる

蛙

105 かはづなく田中の井戸に來て見れば春のあはれは猶

残り

春懷

106 花鳥の色音をおきて梓弓春のおもひのほかにやはあ

る

瀧のほとりの藤

107 落たぎちながれてはやく行春をせきとめ顔にかゝる

藤浪

藤の花をゝりて人のもとに

108 池水の岸の藤なみさきしより我さへ人をまつにかゝ

れり

池の中島なる松に藤花さけり鶴もあり

109 松陰に鶴もあそべは藤の花千世をいづれにあえむと

すらん

やよひのすゑ長門守氏尙の貴船にて郭公聞つと

て 君があたり初音はいかにこのごろは鳴てき

ふねの山ほとゝぎす すむ山のかひ有てこそほ

とゝぎすしのびゝに初音をもきけと有しかへ

し二首

110 世にはまだしらぬ初音をほにあげて鳴か貴船の山ほ

とゝぎす

111 ほとゝぎす聞つと君が語らずば花のなごりや猶した

はまし

三月盡

112 すがの根の長き春日とたのみしもあはれ胡蝶の夢の

一時

夏歌

更衣

113 山端も霞の衣ぬぎ捨つかふるはけきの袖斗かは

山家に住ける比人々とひ來てけふは更衣の歌よ
まんどいひしかばよめる

114 世の人はさもあらばあれ花の香のうせんを時とぬぎ
かへてまし

眞精法師あるじにて聖神寺にて會せしに當座に
ころもがへ

115 ぬぎかへしかとりのきぬは薄けれど春のなごりは隔
はてにき

賀茂の名所をわかつて讀しとき山森を

116 山もりの森の下草かりはらひ神垣いはふ卯月來にけ
り

遅櫻稀

117 夏山のしげみにあそぶ胡蝶かと見ればおくれてさけ
る一花

文政十年卯月ばかり濱松侍從忠邦朝臣始て召れ
し日雨しめやかに降て新樹のけしきおかしかり

賀茂季鷹和歌集

しに此見るけしきをよめとありしかば

118 きのかも花にかこちし雨ぞとは誰か若葉の露に見
てまし

新樹

119 水枝さす葉びろくまがし若かへで花にかへても見る
べかりけり

棚倉殿の庭に橘樹をうゑ給ひけるをりつどひて
歌よみ侍りける

120 千世かけてふみならしませ窓の外にうつし植たる橘
の蔭

卯花

121 見し春のなごりも夏の籬とてあなうの花や咲そめに
けん

卯花繞家

122 卯花にうき世隔る宿ぞとはかつ見るからに過がてぬ
かも

待郭公

123 里やわくまたもや出ぬ分入て見ばやしのふの山ほと

ゝぎす

ほとゝぎす聞つといふ人のあれば

124 人をわく初音と思へばいとゞしく恨かさなるやま郭

公

人傳雀公鳥

125 ひとつてはかひなきものゝ子規まつたのみに成べ

かりけり

聞郭公

126 かへり來んほどは雲井の遠方にきゝていなばの山郭

公

獨聞郭公

127 ほとゝぎすおきみて獨聞ぞ共しらでやもらすよはの

忍び音

裁苗聞郭公

128 さなへとる賤も田うたを一聲にとゞめて聞や山ほと

ゝぎす

曉更杜鵑

129 曉の枕の山の一聲も老はたどらで聞ほとゝぎす

舟の中にて時鳥をきく

130 一聲の行方やいづこほとゝぎす舟さす棹のさしてを

しへよ

社頭郭公

131 片岡の森の梢に鳴すてゝ神山遠くゆくほとゝぎす

家の會に郭公遍

132 里わかずをちかへる頃は時鳥老の耳にもきゝはもら

さす

耳うとく成てのち時鳥聞しといふ人に

133 耳なしの名におふ老は郭公きゝつと聞ぞ初音なりけ

る

郭公幽

134 老らくの耳にはいとゞおぼめくをしらでや過し山ほ

とゝぎす

葵露

135 露結ぶかりねの野べの葵草あすやかざしの玉と見ゆ
らん

みあれにまうでける日

136 山賤のおどろの髪も神まつるをりに葵はとりかざし
けり

祭日葵をかざすとて

137 神山に生る葵の二葉よりかざしなれつゝまつるけふ
哉

直兄縣主がり葵を乞にやるとて

138 神山におなじねざしの二葉草わがもの顔にこひに社
やれ

かへし みあれのゝひとつねざしのふた葉草わ

が垣根こそ君が園なれ

車にのれる人賀茂にまうづ

139 ちはやぶる神の恵にあふひとて道もさりあへずつゝ

く小車

日野一位資枝卿にかざしの料の葵をまわらすと

賀茂季鷹和歌集

て

140 神まつるをりにあふひの二葉よりかけてわすれぬし
るしとをみよ

御かへし おくりこし其かみ山のおふひこそい

くよかれぬかざしとはせぬ祭日富小路殿とひ
來給ひ 神山やあふひは草の名のみかはとぶら

ひよりしかひも有けりどのたまふ御かへし

141 あふひ草かけてしいへば神祭る卯月ならではどはじ
とやる

五月雨

142 しげりあふ軒のしのぶのさみだれもかぎりしられぬ

雲の立まひ

駒くらべ

143 遅くとく足掻もあれどかつはのる人の心の駒くらべ
なる

くらべ馬に乗て家を出行かた

144 乗人の心の駒もしづめてぞ埒のうちは入ばかりけ

る

續命縷の繪に

145. 長きよのためしはひかん薬玉のいつゝの糸も池のあ

やめも

菖蒲ふける所

146. はしきらぬ聖の御代のふることも今日の軒端の菖蒲

にぞしる

山田早苗

147. 繩くちし去年の鹿垣結びそべて早苗とるなり賤が小

山田

早苗うゑわたしたる所そぼつ立り

148. をとめ子がいかにかけるこひちより袂そぼつの身

とは成けん

螢

149. 水くらき岩垣沼のいはねどもしるき思ひに飛螢かな

水上螢

150. 池水の玉藻に遊ぶいくづも驚ばかり螢とぶかけ

151. 夏の夜は火に入むしもあるものを池水さして飛螢かな

螢過窓

152. てらしてもかひなき窓とよひくに見てや螢のあだ

に過らん

たをや女の扇もて螢をおふ所

153. をとめこが扇の風に靡つゝなか／＼高く行ぼたるか

な

鵜川螢

154. 鵜舟さす瀬々の螢もかゞり火も闇をよいしと照す山

陰（文化十二年二月首の日、紙魚室雜記卷三之上）

水雞

155. たが門をさして水雞のたゞくらんあくるはやすぎ夏

の夜の空

月前水雞

156. 終夜たゞく水雞は柴の戸に月おもしろくさせばなり

けり

瞿麥

157 きのふまで見ざりし花も咲そひて錦あらそふませの

撫子

百合の花の咲たるをやごとなき御方より見せ給

ひて歌をこはせ給ふに

158 あめにほふ色もえならず一本は折ともゆりの名に

しおはなん

里蚊遣火

159 あまのすむ里のしるべの夕烟なほ立そふや蚊遣なる

らん

納涼

160 いかにたへいかにしのがん夏の日の暮ても同じ暑さ

なりせば

湖納涼

161 志賀の浦やひと木の松に一聲の秋おもほえてよする

じら浪

橘千蔭源射弦などかいつれて玉川に河逍遙しけ

賀茂季鷹和歌集

る日

162 鰯魚つるとあゆひぬらして玉河の瀬々におり立此日

くらしつ

賀茂河をせき入てすゝむところ

163 世にしらぬ秋おもほゆる袂がな風もながれを尋てや

ふぐ

風生竹夜窓聞到といふことを題にて

164 吹いるゝ竹のよかぜの涼しさに枕もとらずねぶる文

案

夏臥北窓風枕席如涼秋

165 夢さむる手枕すゝしふづくゑの塵吹拂ふまどの夕風

夏雲奇峯多

166 花とのみまがへし山のしら雲も夏はあやしき嶺をな

しけり

夏夢

167 過ぎつることをあまたに見し夢を思へば夏のよほど

しもなし

泉

168 風かよふ松が根しみづ結びては秋を手にとるこゝち

社すれ

祈雨歌とて奉りける

169 むかもゝにひちかきよせて植し田のつちもさくるを

見そなはせ神

姫路の兒島政秀よりせうそこのついでに

名に高き賀茂の川原の夕暮は思ひやるさへ涼し

かりけりといひおこせしかへし

170 夏しらぬ賀茂の河なみ玉ならばつゝみて君におくり

てましを

夏月

171 見るぼどは露のまながら堪わびしひるのなごりもな

つのよの月

外山夏月

172 まかで見る光も涼し玉だれのをすのとやまの夏の夜

月

夏月あかき夜笛をきく

173 秋風やまづしらぶらん夏のよの月にすみ行笛竹の聲

夏月透竹

174 緑そふ籬の竹のしげみより風の見せたる月の涼しさ

窓前竹

175 夏の日の陰と植てし窓の外に涼しくそよぐ竹の夕風

樹陰蟬

176 うつせみのはにおく露もかつ散てしのびゝに秋風

ぞ吹

夏草

177 花さかむ秋やぐちかし今しはらはで見ばや庭の

夏草

はしたて見にまかりし時與謝の海に船うけてす

ぐみに

178 夏しらぬしほの八百路の夕風は早秋津姫の袖よりや

吹

六月はらへしたり

179 心さへ涼しくなりぬみそぎして歸る夕の眞袖のみかは

180 五月蠅なすあらぶる神もなごむらんみそぎする瀬の浪靜なり

雲錦翁家集 二

雲錦集 卷二

秋歌

社頭立秋

181 きのみだに夏をわすれてみそぎせしならの小河に秋は來にけり

初秋風

182 吹そむる荻の上葉の秋の風やがてよそにはなさぬ袖哉

183 夏衣薄しとしるやきのふ今日秋立風のけぢめ成らむ

新秋夕露

賀茂季鷹和歌集

184 夜ごろへて光そふべき月影をやどし初たる草の上の露

初秋薄

185 秋風にまねかずとても初尾花穗に出し野べをよそに過めや

残暑

186 きのみふけふ露は草葉に結べ共馴し扇はおくべくもなし

七夕

187 棚機は弓張月のいるがごと年たちねとや待わたりけん

188 契けん昔の秋はたなばたの人やりならぬ恨とぞしる

野外七夕

189 たなばたやかかげうつすらん逢事のかたのにつぐく天川づら

近衛殿七夕御會に星河秋興

190 月の船紅葉の橋やたなばたの急ぐあふ瀬のほだし成

らん

勝延がり人々集ひて古今集の七夕の歌の初句を

わかちてよみけるに 年ごとに

191 どしごとに絶ぬ物から一夜とはぐやしくがけしかさ

ゝぎのはし

鳥鵲成橋

192 ほねがはす契に星もあえんとてわたしや初し鵲のは

し

たなばた祭する所空を見る人有

193 棚機に心をさへやかしにけん今日のくるゝは立また

れつゝ

七夕庚申にあたりければ

194 逢瀬をばいむてふ夜はと去年の秋思ひかけきや天の

川浪

吾妻を出立けるをりうまのはなむけに川越満祐

が根こじて贈りし薄を庭に植おきしを穂に出た

るころ便につけていひ遣りける

195 故郷をなれもむのはゞ花薄た流すをまねけ人もとふ
がに

朝 荻

196 おき出て待とる袖の涼しさもきのふにかはる荻の秋

風

江上荻

197 たが夢路おどろかすらん舟つなぐ入江の荻のよはの

秋風

朝 顔

198 あさがほは色のちぐさにゝほへ共瑠璃こそことにめ

でたかりけれ

庭萩盛

199 枝たわにほころびぬればしら露も結びかねたる庭の

秋はぎ

閑庭薄

200 とはれぬを心とすめる菴ぞともしらでやまねく庭の

を薄

蘭

201 秋の野にひもどきそめし藤椅尾花が袖に香をばかさ

なん

野女郎花

202 吹風にまかせて靡く女郎花あだの大野にうべもおひ
けり

草花色々

203 もゝ草の花に結べる露ならで心をちよにわくる野邊
かな

栽草花

204 秋の野の虫の音さへに添てけり根深く掘し眞萩葛花
秋草に鶉あるかた

205 百草の花の錦のとこしめて何をうづらの音には鳴らん

小鷹狩

206 宮人の入野の薄まはぎ原鳥狩はすとも花なちらしそ

秋夕雨

207 心なく降来る雨か月待てばかつはまぎるゝあきの夕

賀茂季鷹和歌集

に

秋曉

208 秋よたゞ夕は物にまぎれても手枕しめる曉のそよ

橘千蔭の家刀自本子の望にて女友たちこれかれ

集へて源氏物語を講じける頃七月廿四日夜例の

こと彼家にて鈴むしの巻を講じはてければ月待

て歸りねとせちにとゞめられて子時ばかり待出

し夜のさまいとおもしろかりければとめて

209 みやびたる君しとめずば廿日餘りよふかき月の影を

見ましや

といひやりければかへし 千蔭 きぞの夜の月

にあかずて廿日餘りいつかきますと待れもぞす

る

機織

210 女郎花おほかる野邊に夕されば機おる虫の聲しきる

なり

三條わたりに住ける頃庭の草たかう茂りたるを

常に來る人ごとにあなむつかし都のうちとても

かく草深くては蛇などの恐れも侍ればなどいふ

をしらぬ顔にて所得させたりしは秋さらば虫の

音きかん下心あればなりけりさて其ころにもな

りければみあれ野わたりにて松虫鈴むしなどゝ

らせたるをもてきて彼のくさむらにはなちたり

しに所かはれりとは思ひたるけもなくでしきり

に鳴をこゝに集へる人々草はらひ給はざりし心

を今こそはなどかたらひつゝ聞はやす比しも南

隣の家もる翁ゆくりなく來りて餘りに草茂りて

柱根も朽侍りぬべければ明日なん人おこせては

らはせ侍りなんといへりければ

211 花もなき庭の草葉はさもあらばあれなん虫の聲

をしぞ思ふ

かく書て隣になげ入させればいかゞおもひけ

ん草もはらず成にけり

若狹に下りける時細川といふわたりにて晝鹿の

鳴ければ

212 いとせめてつまや戀しき秋山にくるゝもまたぬさを

しかの聲

甲斐權守に侍りし比貴船社のとのひ所に侍りて

鹿のなくを聞て

213 友とたのむなれも我名をよび顔にかひよと鹿の聲ぞ

聞ゆる

またの夜犬のいたくなきしがあやしさに朝とく

出て見れば後園に作りし大根の葉をみなくひは

てたるを此わたりの人にとへば鹿のしわざなり

といへりければ

214 つまごひにあはれと思ひしさをしかもけさはたにく

しいかにかもせん

放生會

215 石清水いはねばこそあれ月影にひれふるいをや恵知

らん

縫子が家の會に三日月

216 秋なれや雲のはたてにほのめくも光ことなる三日月

のかげ

十五夜月を見て

217 月はあきあきはこよひとめでそめし心もしるくすめ

る空哉

218 類ひなきひかりをよみに敷島や倭しまねの秋の夜月

仙臺殿の京なる館にて十五夜人々歌よみけるに

逢隈川の月を

219 たれもかく曇らぬ御代にあふ隈の川のなみあてめづ

る月影

千蔭が家に人々集ひて歌よみけるに月のまへに

ふみゝるという題にて

220 よみとかぬふみをば月のくまにして心にうかぶ世々

のふること

駒迎

221 相坂の關の清水に名にしおふ月毛の駒のかげも見え

けり

十六夜月

222 きのをば空かぞへかとたどるまで影すみ渡る十六

夜月

223 きぞのよを最中こよひをいざよひと月の光に誰かわ

くべき

山月

224 駿河なる不盡のねかけてすむ月を武藏野の原に出て

みる哉

深山曉月

225 ながめつゝ我世もいたく更にけり身をおく山の有明

の月

閑居月

226 露の身をおくばかりなる草の菴に宿かる月の影の靜

けさ

故郷月

227 故郷の軒もる月は秋ごとにすみあらしめてぞすみまさ

りける

月欲入

228 山端はましにげぬともいかにせんしのゝめ近き秋の

夜月

229 つぐりけむすくなみ神ぞうらめしき月の入さの山高

くして

月出山

230 なごりなく雲霧はれし山のはは月も心や澄のぼるら

む

月前風

231 はげしかれ月には雲ぞうかりける初瀬の山のよはの

秋風

月前雁

232 櫻花見すてし春の心をば月にみよとや渡る鴈がね

月前薄

233 むさしのゝ尾花をやどに植しかば月見ん秋も限しら

れむ

月多秋友

234 友と見てこゝらの秋に馴しかどおもかはりせぬ月の

影哉

社のはとりに月を見る

235 柿葉にかけし神代のますかゝみいやますゝに澄る

月哉

武藏野に月出し所

236 徒にまねくと見てしむさしのゝ雄花がすゑに出る月

影

遣水に月のてるを見て

237 せき入て心ひとつを遣水に月さへすめる秋のよな

く

海邊月

238 よさの海や松吹風に霧はれて月すみ渡る天のはし立

廣澤池眺望

239 廣澤の池の底なる玉藻にも光かしたる秋の夜月

廣澤の月見んとてこれかれともなひ釣殿にめで

みたるにそこあけよと家あるじしていはするは

大覺寺殿の御うち人なるべし其こたへはせでか
くよみて遣しける

240 かゝばかりをしと思ふ夜の月影をあけよと人のいふ

があやなき

きて月いさゝかかたぶきぬれば嵐山あたりに行
てみゐどでそこをたづに鹿の鳴ければ

241 いざよひのいざとて月に分來つるかひよとや鳴嶺の
さをしが

北邊大臣のいにしへ住たまひしあとに家居せる
富士谷御杖がもとより消息のおくに 水上はい
かにかすむと賀茂河の月見るたびにゆく心かな
ど有しかへし

242 山がげの友を尋じふることを月にたのみて夜ごろへ
にけり

九月ばかり富小路殿にて連歌有けるをりしも軒
ちかき栗の落しをひろふとて

243 言葉の花にいとほぬ夕嵐待えてひろふ庭のおち栗

賀茂季鷹和歌集

難波にて村井時雍にいざなばれて舟にて十三夜
月を見しに昔丹後がことうらに澄月は見るとも
どよみしより異浦の丹後とよばれしことを思ひ
出て

244 とく歸りみやこの人に十日餘りみつとかたらん浪華
江の月

九月十三日夜丹波に下りて月を見て

245 入をのみかこち馴にじたには路の曲のこなたに月を
見るかな

暮秋月

246 入ぬべき山方なく共いかにせんながつきの月の有明
のころ

旅人砧うつを聞たる

247 衣うつ夜ざむの里の秋風はかたしく袖をよきてふか
なん

擣衣何方

248 いづこ共聞こそわかね秋風の吹たゞよはす夜はの砧

は

月下擣衣

249 おのがおもひ千里の外にひゞけとてうつか砧の月に

すむ聲

250 賤がうつあさのきこころも月故にいをねぬよはをかさ

ねてぞ聞

名所擣衣

251 秋しのや外山の月を夜よしともおもはで賤や衣うつ

らん

九月ばかり成壽に必と契りたりしをさはる事あ

りとして 山里ははやくしぐると聞なれば梢のみ

こそ思ひやらるれといひおこせけるかへり菊紅

葉をゝりて

252 下もみち染て待こし山里に君がこずるときくがあや

なさ

日野資枝卿に櫛のもみちたるにそへて

253 もみち葉は是をやはじめ秋山のやま口しるき色をみ

せばや

御かへし 心ざし深き根こじのはじ紅葉げに賀

茂山の秋をこそしれ

妙法院宮にて紅葉交松といふ御題を給りしに

254 千歳經ん松のみどりに時のまの色をあらそふきこの

もみち葉

紅葉多かる山に月すめり

255 もみち葉を夜の錦になさじとや尾上に高く月も澄ら

ん

高雄山の紅葉はいかで古人の見残しけんと年比

思ひわたりしに隣女集にはやくよみ置給ひしを

見出しは千入よりげに身にしみて珍らしくおほ

えて

256 ふりおける言葉の露に一人の色そへて見る木々のも

みちば

紅葉の宴しける日風吹ければ

257 山かぜもけふはいとはじもみち葉の錦を人にきせて

かへさむ

河渡らんとする人の紅葉散を見て駒をひかへて
たてる所

258 水かふとよそにやみらんもみぢ葉をふまゝくをしみ
どめし我駒

259 山水に紅葉散てなぐるゝ所
川の水

紅葉浅深

260 薄くこき木々のもみぢはさだめなきしぐれの雨や染
渡しけん

家の紅葉盛なる比人々をつどへて歌よみしとき

山家秋興

261 菊紅葉折かざしつゝかへさには眞袖にひろへ庭の落
栗

紅葉多かる山路行人あり

262 錦もてつゝむに似たり秋山を分行人は玉ならなくに

賀茂季鷹和歌集

水邊菊

263 秋ごとに千世の契を結ぶ手の雫も薫る菊のした水
菊の花さける山路ゆく

264 行やらで千歳やへまし菊の花にほふ山路の秋のたび
人

月前菊

265 月影をおきまどはせる霜かとはらへば薫る露の白
菊

菊の造花に添て人に遣すとして

266 仙人のめづてふ菊の花なれば秋は過ともうつろはめ
やも

菊のかたに

267 やまびどの折かざすてふ花のみや暮行秋をよそにき
くらん

小濱殿の姫君の當座に寄菊祝

268 草も木もうつろふ秋を時とさく菊の色香ぞ世にたぐ
ひなき

冬歌

269 鷹司前關白殿の御園の菊を見せ給ひはるに
よそにのみきくのしら露しらざりきかゝる色香の世

には有とも

妙姓尼のもとに人々集ひて歌よみしにきくのう
つちひ盛なるをひとにといふ題にて

270 見せばやなうつらふ色は紫のひとつもとび來ぬやどの
しら菊

貴船の社に侍りける頃成崇縣主來りて淋しさい
かにといへるに

271 思ひやれ算の水のおとづれも落葉に埋むあきの山里
九月晦日菊にそべて人のもとへ

272 けふのみの秋をもよそに菊の花萬代かけてかめにさ
せ君

273 九月盡
うき物になれめ捨てし夕暮も限となればをしき秋か

な

山家初冬

274 薪つみすゞしる掘て山里はかきこもるべき冬ざりに
けり

275 社頭時雨
奉る幣帛なぬらしそ村時雨ぬかく袖はさもあらば
あれ

276 近衛殿の御月次に瀧邊時雨
大原や名におふ瀧のおとなしに音をかしつゝ降時雨
かな

277 都時雨

よしやふれ都大路のむらしぐれ軒端づたひに袖はぬ
らざし

278 旅行時雨
ぬれ心とていそぐ旅路に行めぐり時雨もあしはやす
めざりけり

279 村しぐれふるからをのゝもとがしはもと來し道は夕

日てらせり

風前時雨

280 吹かはる空の嵐にさそはれて思はぬ方に行しぐれか

な

夜時雨をきく

281 いとすししくぐるゝよはの寒けきやすきまの風もぬ

れて吹らん

嶺時雨

282 そめ残す梢はあらじ筑波ねのこのもかのみに時雨降

ころに

月前時雨

283 いやでりに照まされとや村しぐれ月のかつらに降そ

るぐらん

貴船に侍りける頃月あかんで時雨のふりければ

284 鞍馬山ふもとの里はしぐる共しらず顔なる月の影か

な

十月のはじめ濱松侍従忠邦朝臣雲錦亭にとはせ

給ひしに紅葉の多く残りければ

285 君がためもろくは散らぬもみちばにあえなば老も幾

秋かみん

御かへし 冬たちて後まで残るから錦うべ我爲

ときてこそは見れ

落葉すりたるきぬに

286 小倉山今一しほの秋の色は散てもみづる木々のもみ

ぢ葉

關路落葉

287 逢坂のせきちの紅葉散ころは行き歸るも錦きてけり

落葉深

288 ちるが上にちるもみち葉を紅にくゝりかねたる谷河

の水

殘菊

289 霜をへてうつろひかはるしら菊をあらぬ花かと思ぞ

まがへつる

霜

290 むさし野のむかひが岡も霜がれて根を尋ぬべき草のはもなし

寒夜水鳥

はもなし

寒草霜

296 池水のこぼれるほどはあし鴨の立さわぐよはの聲に
しられつ

291 野邊見れば萩も尾花もおしなべて霜のおきな草と

冬月

成にき

冬草

297 隈となる木の葉は風にはらはせてひとり影すむ冬の
夜月

292 露は霜にむすびかへても残りいづらは秋のちぐさ

298 すさまじきためしもしばしわすられてむかへば氷る
袖の月影

もゝ草

池水鳥

仙臺中將殿によみてまゐらせし百首の歌の中に

293 もみち葉も錦をしける池水に青羽まじへて遊ぶあし

冬月

鴨

299 過がてに誰ながめけむ琴の音も月にさえたる木枯の
やど

千鳥

294 求食する千鳥は浪の何なれや立ぬを夜たゞ打まかす

かれたる芦邊に月すめり

らん

300 すめり共誰かはとほん霜こぼる難波のあしのよはの
月影

海邊千鳥

295 浦波のたちてもゐても君が代をやちよと鳴やわが友

炭竈

ちどり

301 降つもる雪にもたえぬいとなみは烟にしるき峯の炭

竈

初雪

302 草も木も花かと思えて花よりもいや珍らしき朝の初

雪

303 けぬがうちにとふ人もがな菊紅葉うつればかはる庭

のはつ雪

304 降なばとさしも契りし都人しらでや消んけさの初ゆ

き

305 大かたに降初雪を珍らしみ我やどのみと思ひけるか

な

306 ふみ分ん跡を思へばとふもうしとはぬもつらし庭の

はつ雪

山家初雪

307 とふ人もあらしのはに降初て雪も友まつみやまへ

の里

近衛殿御兼題雪

308 ふみわけしあとある雪に野路行ばかをらぬ花も袖に

賀茂季鷹和歌集

散けり

雪散風

309 吹さそふ風のまに／＼散雪はちるをしまぬ花と社

見れ

旅行雪

310 むかし見しあこの松原雪ふれば面がはりせりあこの

松原

雪中に友をとふ

311 君がまつ心の駒やさそひはん雪にも道はたどらざり

けり

雪の日に人にとはる

312 降うづむ山路の雪と分入し君が心といづれふかけむ

313 君がいなば見つゝを居らん分來つる跡をも雪のよき

で降らん

掃雪待客

314 柴の戸の内外の雪は拂へ共おぼつかなしや岩根まつ

がね

遠山雪

315 むさし野に山の端なしと見し人にみせばや雪のちゝ

ぶかひがね

故郷雪

316 朽し軒あれし籬も雪ふれば昔にかへるふるさとのに

は

山家雪

317 村がらすねぐら尋てかへらずばくるゝもしらじ雪の

山陰

馬にのれる人雪ふるみちを行かた

318 行道は老たる駒にまかせても拂ひぞわぶる袖のしら

雪

加賀國伊藤某が家の庭のたゞむかひに駒嶽むが

ふよし其ころの歌よみてよと眞恆僧都して乞

しに

319 しるべする駒ならませば四時きえせぬ雪を行て見ま

しを

貴船に侍りける頃雪いたく降ける夜

320 軒ちかき簀の水は音絶て雪に聲あるよはの山里

臨時祭御再興のとき

321 そのかみにかへすぐもかしこきはけふの祭の山あ

みの袖

爐邊閑談

322 埋火のもとつ心をかきくづしかきおこしつゝかたる

よは哉

富士谷御杖が冬籠せるをとひて

323 ことさらに思ひおこして分入し山のかひある埋火の

もと

かへし かくばかりけぬるきねやの埋火をたち

はなれてもとひし君かな

早梅

324 花といふ花におくれて花といふ花にさきだづ花は此

花

雪中早梅

325 春またでとくさく窓の梅がゝをねたむか雪の降かく

しける

竹ある家に年暮る

326 吳竹の千尋ある蔭にかくろひて年をしげにも見えぬ

やどかな

歳暮

327 身につもる物ともしらで春待し昔にかへる年浪もが

な

328 とゞまらぬ年はをしまで老もまた待むかへてん花鳥

の春

雲錦翁家集 三

雲錦集 卷三

戀歌

初戀

329 いづこより種をとりてか戀草は心にふかく根ざしそ

賀茂季鷹和歌集

めけん

330 やはらける言葉の露をかことにて千入をいそぐ戀の

山口

忍戀

331 山城のとはに思へど陸奥のいはでしのぶはくるしか

りけり

共忍戀

332 さてもまたうき名やたゝん諸共に忍ぶ袂の色しかは

らば

333 諸ともに名をゝし鳥のうきてのみ思ひにしづむ袖ぞ

ひぢぬる

いひはじむ

334 いひそめて餘りに人のことよきもうたがはれぬる物

にざりける

待空戀

335 なかゝにたのめざりせばぬ婆玉の夢には人にあは

まし物を

夢中逢戀

336 うらとけて逢と見つるぞおもひねの夢としりてもか

つは嬉しき

337 玉藻なすかよりかくよりなびきぬと見し夜の夢を現

ともがな

白地戀

338 なごりには袖のみぬれて夕まぐれよするまもなくか

へるしら浪

うちきて逢へる

339 さゝがにのふるまひしるき暮ぞとて待むかふるも夢

ごちせる

になきおもひ

340 玉だれの内外隔てぬ道ぞとはひとりさだめて戀ふる

あやなさ

ちかくてあひがたき

341 あまのかるめくはすのみをたのみつゝいつまで我身

うみ渡らん

342 面影をかはと見ながらあふせなき我身はうらといふ

べかりけり

祈逢戀

343 とし月をかけしもしるくきぶね河あふ瀬うれしき波

のしらゆふ

遠く隔たる

344 松に吹風の便もたえぬるや心をさへにへだてはてけ

む

あひおもふ

345 いもとわれいづらやまさる思ひ川いざおり立て深さ

くらべん

日野一位殿の御會にまゐりあひたりしに思とい

ふ御題を給はりて

346 我むねのなどゝことはにもえぬらんおもひは人につ

けてし物を

不逢戀

347 しかすがに絶ぬ物から奥山の岩間にむせぶみづから

ぞうき

348 山科のやまず戀つゝ年ふれどこえこそわぶれ逢坂の

關

349 心のみ空になしつゝ棚機の契ばかりのあふせだにな

き

後朝

350 ここの葉をかさはぬのみのわかれにて猶身にそはる

けさの面影

後朝恨戀

351 歸り來て思へはつらし鳥がねを待がほなりし今朝の

別路

妙法院宮にて御當座夕戀

352 さゝがにの糸にかゝれる玉のをゝたえねと吹か松の

夕風

顯戀

353 霧はるゝ瀬々のあし路木あらはれていとゞ我身をう

ちの川づら

賀茂季鷹和歌集

忘戀

354 いかにして種をとればか忘草人の心におひしげるら

む

くちかたむ

355 せき入も水のみなぐちかためつゝ池の心をもらすな

よゆめ

切戀

356 花すゝき穂に出しよりさをしかの音になきぬべき戀

もする哉

恨戀

357 大よどの松はつれなき色としもしらでかけたる年浪

ぞうき

358 見せばやな人の心の秋風にあへずみだるゝ袖のゆふ

露

月前露

359 あはれとはうはの空行月も見ん袖にやどさぬ夜半し

なければ

360 ひさがたの空だのめして來ぬ人に見せばや袖の露の

月影

老後戀

361 老ぞうきあなあやにくに見初てしおもかげのみは物

忘れせて

戀

362 弓箭とりあたにむかへるものゝふの命をしまぬ戀も

する哉

363 うらむべきふしもしばしはのどめつゝあはれしるや

とまちこゝろみん

364 なげきのみこりまさりつゝぬば玉の枕の塵も山とつ

れは紙

もりて(文化十一年二月首の日、紙魚室雜記卷一之上)

寄月戀

365 月待といひていをねぬ偽を誠となしゝ人のつれなさ

366 姨捨の山ならなくに月見つゝなぐさむ夜なきひとり

ねの床

九月十三日夜敷久縣主の家に集ひて十三首歌よ

みけるに寄月忍戀

367 消かへるしのふ袂の露ぞともしらでや月は影やどす

らん

寄雲戀

368 戀わびてはれぬ心のうき雲は夕にかへる山だにもな

し

寄瀧戀

369 うき名のみ世にながれつゝ逢事はたえて久しき瀧の

白糸

寄涙戀

370 色かはるなみだしなくば何にかは深き心のほどを見

せまし

寄棹戀

371 いつまでか逢瀬浪まのみなれざを馴るゝかひなく袖

ぬらすらん

寄車戀

372 わくらはにめぐりあふ夜は小車のくさびを我や井に

入てまし

寄烟戀

373 富士も今はたゞときけば我胸のおもひの烟たぐひ

やはある

寄木戀

374 あふみてふ名をたのみつゝ年をへて立る一木のまつ

ぞかひなき

寄鳥戀

375 いとせめて思ふといへばいとせめて思ふてふ鳥も有

としらずや

寄獸戀

376 我妹子が心の駒もつなぐべく身を若草になすよしも

がな

寄虫戀

377 伊勢の海人のあまりにつらき人故は藻にすむ虫の名

さへ忘れつ

狩する男山ざとびたる女の家に來れる

378 ふか草のふかきおもひに分來てもかりにとのみや人

の見るらん

かならずとたのめで來ざりし人のもとへつとめ

ていひやりける

379 まち出し袖にとまらば君にけさ見せまし物を有明の

月

女の曹司によなく立よりて物いひて後といふ

ことを

380 わたつみの沖へふかめて打よせし波のなごりを見る

よしも哉

こと人に物いふときゝし男花の頃來りければと

いふこゝろを

381 ともにまたあだなる名をやたてなまし花見がでらの

人はとゞめじ

ものいひける女のもとに扇を忘れてといふ題に

て千蔭 たわすれし扇のみかは妹がりに心をさ

へに残し置てきとよめる歌のかへしを女にかは

りて

382 忘れしを妹の扇と思はずば名を頼ても手ならしてま

し

棚倉殿に参りける日後撰集に女のみやづかへに

まかり出て珍らしきほどは是かれものいひなど

し侍りけるをほどもなく一人に逢侍りければ正

月朔日ばかりにいひ遣し侍りけるよみ人しらず

いつのまに霞立らん春日野の雪だにとけぬ冬と

見しまにといふ歌のかへしの心をよめとありけ

れば

383 降つみし雪だにとけぬ春日野にいかなるなをか人の

つみけん

おなじ殿の御會に各古歌のかへしをよまんと有

しに新古今集に初て女に遣しけるとて大江匡衡

朝臣の人しれずおもふ心はあしびきの山下水

のわきやかへらんといふ歌をさぐりて

384 人しれず心わくてふ足曳の山下水をたれたかのまむ

何となくさすがにをしき命かなありへば人も思

ひするやとゝいへる古歌のかへしを

385 何となく惜てふ命得てしがなうきにたふべき我身共

なし

源氏物語の夕霧の卷の中なる詞をわがちて人々

歌よみける時瀧の聲はいとゞ物思ふ人をおどろ

かしがほにといふをさぐりて

386 せきわぶる袖の涙も有ものをあな音高し夜はの瀧つ

瀬

相聞擬古

387 ありそ海のいくりに生る玉藻なす靡くわぎもを忘か

ねつも

賀歌

有栖川中務卿親王從

仙洞御所古今御傳授の竟宴に松有歡聲という御

題にて

388 言葉の散うせぬのみか萬代の聲も常盤の國の松風

同宮に寛政八年の冬ある人縁毛龜を奉りける時

歌奉れと 仰ごと侍るによみて奉れる

389 竹の園に縁の龜もあそべれば千世萬代は君がまに

圓臺院宮 近衛内府公 御母公 五十御賀に

390 幾千世ぞはこやの山も遠からで君が御園にかよふ松

風

陸奥白川殿の五十賀に

391 今日よりの老はなこそ關するて君や千年をまつが

浦島

濱田殿の五十賀に春祝

392 此春を千年の春の始とは君ぞながらへてしるべかり

ける

濱松殿にて寄弓祝

393 幾千年弓は袋に治れる御代のためしにひき傳ふらん

三島自寛七十賀屏風をむすこの景福が調じける

賀茂季鷹和歌集

に納涼のかた

394 夏しらぬ松の下水結びては千世を手にとるこゝち社

すれ

小野蘭山八十賀に

395 漢倭生薬てふいく薬みてゝ千年を経ん人やたれ

三宅行達母の賀を九月ばかりにしける日人々集

ひて歌よみける中に同文字なき歌

396 秋山に春の色をしわすれよと櫻がこえだ紅葉そめけ

む

三宅公輔が父望之が六十賀に唐琴の浦を

397 契るからことなる浦の松風や千世の初音を調そめけ

ん

琴を常にもてあそべる玉堂が七十賀に

398 行末も稀なることのためしには君が八千代をひくべ

かりけり

松原幽に住る時定が父の七十賀に寄松祝

399 並立る千世の松原まつばらにかぞへて見よや老の行

末

三河人六十賀

400 老つ鳥老つともいはじ行末の千代を思へばわらはべ

のうら

夫婦の八十七十になれる祝歌を人のこへるに

401 立なまぶ松と竹との深みどり千年をよその物とやは

見る

重殖縣主の上階をほぎて扇を贈るとて葵にむす

びつけて

402 神と君をさぞな二葉にあふぐらし三の位の山路分み

て

直慶が妻をむかへし時壁に鶴の繪かけたるをみて

403 諸共に千世の影みる池水の深き契りも類ひ有けり

陸奥人の五十賀に

404 契り置て榮行末の松山は千年の浪も越ぬべらなり

歌仙堂造り終て文化八年三月十八日人々を集へ

て當座に祝言

405 花の雲紅葉の錦萬代に立かきぬべき今日の圓居か

松追年友

406 君ひとり千歳の春やかぞへまし友と砌の松をうゑず

ば

春日山祝

407 春日野の飛火ののべも名のみして山靜なる君が御代

かな

雜歌

天

408 神代よりすめるをもとつ心とはなきたる空をあふぎ

てぞしる

國

409 千五百秋みづほの國を安くにとしづめましけん神の

たふとさ

神祇

410 夜のまもりひるのまもりと天つ社國つ社やしづめま

しけん

寄麻神祇

411 大ぬさの引手にさぞな靡らん天の社もくにつやしろ

も

廣前にて江門の岡田常陰が琴ひくを聞て

412 神山の嶺の松がぜしらべあひてことの外なる音をも

聞哉

芳野龍田の花紅葉を根こし植て雲錦亭となづけ

て額を二條關白殿に甲斐守保考縣主もてねが

ひ侍りけるに則書て給はせけるぞかしこきや其

庵に寛政十三年しはす廿日あまりにうつろひて

413 千々の春萬の秋も雲と見え錦とまがへ名にしおふ木

々

遠山朝

414 あさげたてふもとのけぶり立そひて雲もわかれぬ遠

の山端

415 朝まだきおき出て見れば鏡山まゆのごとくにかゝる

賀茂季鷹和歌集

横雲

曉の鐘

416 かねのおとは昔よりけにきこゆなり耳うとくなる老

の寢覺に

山家經年

417 花をめで紅葉に染る心こそ捨て浮世のなごりなりけ

れ

山家

418 いでじとはちかはぬ橋も朽はてゝ道こそなけれみや

まべの奥

419 をりふしの人め待しは山里に住つくまでのこゝろ也

けり

山家松

420 軒近き松は昔の友ぞとも誰かは後にみやまべのいほ

山家水

421 友と見てすむ山陰の岩清水何世中にながれ出らん

山家牆

422 おのづからかきほをなしつつ山里の窓の吳竹軒の椎柴

山家夢

423 山住も夢は心の外なれやすてゝこし世に行かへるら

む

山家棧

424 世のなかにかけて思へばなかくにあやうげもなき

谷のかけはし

山家客來

425 やまざとにとひ來る人は心して浮世がたりをかけず

もあらなん

山家猿

426 庵しめて誰か聞らんおく山のあはれまじらの夕暮の

聲

山家友

427 携し三の外なる友なれや軒端の篋峯の松かぜ

暮山雨

428 こもりくの泊瀬の檜原雲とちて雨うちそゝぐ夕淋し

も

閑居友

429 とはれじと入にし山の奥までも猶身に三の友はそひ

けり

樵夫歸月

430 分入し爪木の道のはるけさはかへさの月の影にしら

れつ

田家水

431 さ苗うゝる時來たるらし賤がすむ田中のあどの水の

濁れる

暮村鳥宿

432 暮ぬとてしむるねぐらの一枝も猶やすからず立さね

ぐ聲

披書逢昔

433 石止ふるきむかしに夢ならであひみるものはふみに

ぞ有ける

披書知昔

434 水ぐきの跡しとめずば千磐破神代の手ふりいかでし
らまし

庭上竹

435 唐國にみをはむ鳥もすむばかり植し吳竹茂あひにけ
り

近衛殿御會に池岸有松鶴といふことを

436 岸の松汀のたづの八十歳を君にとよする池のさゝ浪
名所鶴

437 君が代は長井の浦に住たづもゆたにやおのが千世を
經ぬらん

住吉社にまうで侍りしをり

438 住のえの松の木陰はとく暮て夕日隈なき淡路島山
みをつくし

439 難波がたしほひに見えぬみをつくし立るかひなき世
にもふる哉

奈良にまかりし時猿澤池を見て

440 青柳に底の玉藻も靡あひてさゝ浪すゞし猿澤の池

賀茂季鷹和歌集

始であづまに下りし時富士の麓に宿りて

441 今日もまたふじのすそ野に暮にけりあすもかくてや
草枕せん

富士山

442 塵ひちの積りてなれる物ぞとはふじのねしらぬ人や
いひけん

443 あづまちの行かひごとに見しめにも驚かれぬるふじ
のしば山

門

444 花のあした月の夕はどちこもる葎のかどもえこそ戸
ざゝぬ

杖

445 つらづゑぞ先つかれける石上ふるき姿のかはり行世
は

鏡

446 見るまゝに心の塵も拂けりふりぬるふみや鏡なるら
む

妙法院宮御會に金という御題にて

447 やつこなすつかふと見てやこがねさへあたりちかく
はよりこざるらん

青

448 水や空そら行雲もなぎはてゝひとつ縁にはるゝ海原

正述心緒

449 徒に世をつくさめや天地にすこしいたらぬ丈夫のと

も

曉述懷

450 聞しこと見しことさはに思ひ出る寢覺の床ぞかつは
なぐさむ

有栖川宮の御前にめされし日述懷の御題を賜は

せければ

451 言葉は竹の園生に分入れど世にどむべき一ふしも
なし

又のとしの御當座始に春述懷の御題にて

452 ひく人もなくてやくちん春の野の子日にもれし松な

らなくに

一とせ下つふさの國に遊びし時夏麻びく海上瀉
と萬葉集によみし海づらもゆかしうおぼえて彼
海べに遊びしをり拾ひし龜のかたなせる石を青

蓮院尊眞法親王のこはせ給ふに添て奉れる

453 君がかくみどりの龜もわたつみの浮木にあへる類ひ

ならずや

栗田の宮の御園に西行法師の都のつとにとて宮

城野の萩を根こじて吉水僧正に奉られしを笈の

うちと名づけさせ給ひて今もめでさせ給ふとな

ん其古枝をまをしおろして筆に調せさせて丸毛

長門守利隆ぬしの贈られしを悦びてまうし遣し

ける

454 みやびたる昔の人の心さへ手にとりて見る君がたま

物

芝山中納言持豊郷に名古會關の櫻木の石に化し

たるを鎮子にしてまゐらすとて

455 櫻木や石となりけん色も香も君がこと葉の花にゆづりて

御かへし 言葉の花さへさけるさくらいしよゝ
につたへてよそにちらさじ 三寶院高演僧正の
御屏風の料とて入道一品宮より 仰承りてよみ
て奉りし歌五首海棠の枝に鳥のとまれるかた
456 此鳥のたましひさへやとばすらんゑへる手翳女の花
のゑまひに

夏山陰に釣殿めけるかた
457 かつ見ても涼しかりけり茂りあふ山かたつける水の
おぼしま

蘆に雀のとまれるかた

458 おのが名のすゝにはむれで一本のあしのうら葉に千
世と鳴聲

琴ひき碁かこめるかた
459 夜晝の色なす石によるひるのけぢめもしらず遊ぶ此
わざ

布袋和尚のかたはらにうなみ子あるかた

460 うなみ子が心のなきをこゝろにて心やすくもあそぶ
法の師

坊城中納言殿に敦直縣主の墨跡をまゐらすとて
つゝみ紙にかきつけゝる

461 心なき名をやながさんせき入し此水ぐきの世にしも
れなば

三寶院僧正より 有栖川宮に御消息せさせ給ひ
て白山かきしかたに歌よめと仰かうぶりでよみ
て 宮まで奉りける

462 消る時なしとし聞けばふじのねの雪にもまさる雪は
此山

有栖川宮の御會にまゐりてきぶらひ所にて御題
を給はりて硯にむかひたるに箱の中に錢のひとつ
つふたつ有ければよみ侍りし

463 難波津をならふ硯の海なれや見るめにあしの先さは
るらん

濱田の殿よりをさなきものにきぬ給はりけるを
かしこみてふみのおくに

464 大船のかとりのきぬの隔なみ薄きはあつき恵とぞし
る

おなじ殿に春のはじめつかた爪袋をひとへ梅の
重にぬはせて五葉の枝に付てまゐらすとて

465 松かぜにしらべかよへる琴の音も千世のためしにひ
くべかりけり

小笠原佐渡守殿に萬葉集類句をまゐらせける御
返りごとの奥に 年を経し此身の幸に賀茂川や
後瀬くみゝる世にもあひけり 往昔も思ひ出て
こそうれしけれかけてよせけるかもの河浪とよ
みて給はりければ

466 言の葉の花はさかねど君によりこのみはまたもなり
出なまし

小餘綾侍從殿の詠草見せたまひし中に蓬律を植
てかりいほ造れりとして 世はなれぬところなが

らもしづけさを心にむすぶ草のかり庵とよみて
おこさせたりし返しにとて 殊更に植し葎の草
の庵是ものどけき世のじわざかもとあるかたは
らにかいつけてかへしまゐらせける

467 拂ひわぶる我よもぎふをことさらにうゝらん人とか
へてすまばや

嵯峨臨川寺南宗長老をとぶらひて日ひとひ漢倭
の物語して

468 いくばくもあらじ我世を同じくはかゝる所につくし
てしがな

猪苗代謙庭法橋の 宣下かうぶられし悦につぎ
紙を贈るとて

469 つぎ／＼にふみ見し世々の跡とめてやすらに渡る法
の橋かも

江戸に有し比神主保麗卿のもとより賀茂川の石
もて造れる硯にそへて 思ひ出よさかひ隔て見
る石に賀茂の河水すみしあたりをと有しかへり

墨筆など贈けるに添て

470 賀茂川の深きなさを見る石にいとすみこしかた
をしぞ思ふ

伴蒿溪が深草ちかきわたりに住るをとぶらひて
471 君とかくかたらふほどはふみならで昔の人に逢こ
ちせり

といひしかばかへしにしへを我はしのぶを
君こそはいにしへのひと古の人

本居宣長京にのぼりて橋本常亮をあないにて始
て我雲錦亭をとほんとて來れる時京に出るみち
なかにてゆくりなく出あひければ 千早振賀茂
の川浪立ながらあひ見し君はをしくもあるかな
とよみて出しけるかへし

472 別るれどうれしくも有かとはかりに二見が浦の名を
やたのまん

岡崎の蘆庵をとひしに庭に青石の高らかなるが
あるはなからん跡のおくつきにおくべき料なり

ときいて

473 昔のむすいはほならでは君が經ん千年の後を誰か待
みん

卯月ばかり荷田信美來て去歲をとゞし度々といひ
來ても居あへてあはざりけることなどいひて
神山に生る葵の草の名をまさしき物とけふぞし
りぬるとよまれしかへし

474 諸共にけふははれにき徒にいなりの山のすぎし恨も
宇佐の大宮司公古卿上階しける悦申遣すとて

475 時しあれば願も三の位山たどりしほどのうさや忘れ
し
かへしたどりつるうさは忘れて位山こえし恵
をあふぐばかりぞ

松山殿に仕る金子義篤が國の湯あみに行しつと
にいよ簾を贈りて さゝ竹をまばらにあみしい
よすだれかけてひなびし世々を見せばやと有る
かへし

476 みやびたる君によらずはいやすだれたれか昔をかけ
て思はん

金田一齋に始て逢し時 神山のふた葉の葵それ
ならでかけてぞたのむ老の行すゑといへるかへ
し

477 神山にとしはふれどもあふひ草言葉さへにふたばな
りけり

後撰集の詞を題にて人々歌よみけるに甲斐守に
侍りける時都へまかりのほりける人のもとへ遣
しけるといふをさぐりて

478 しほの山さしての磯のさしてこしかひありぬべく言
とれや君

下總國海上わたりへまかりてかへるをりに橋本
清命が いとゞしく夜の舟路の旅衣とまもる雨
に袖やぬれなんといへりしかへしほどへて

479 かくばかり君がおもひのそひながらなど旅衣ほしわ
びにける

江門に住し比源氏物語竟宴に春秋のいどみをせ
しとき秋方にて

480 あくがるゝ數ならね共もみち葉にそめし心は散べく
もなし

又源氏よみはてゝこたびは日本紀竟宴にならひ
て彼中の人々をわかつてよみしに紫上を

481 ますかゞみ面影にして時のまますまのうら波かけぬ
まぞなき

本居宣長が古事記竟宴に御眞木入彦惠命を

482 天地の神もにこみて男のゆはず女のたな末のみつき
まつりき

城戸千楯が家に人々つどひて歌よみけるに古今
集の詞がきの友だちの久しうまうで來ざりける
に遣すといふをとりて

483 君とわれことしあるごとうと濱のうとき月日のつも
りける哉

夫木抄をたゞしけるととき釋教の歌の多かるを見

て思ひつゞけし

484 日の出る國に生れて月の入る西へはゆかぬ我心かな

紫式部が筆のあとを見て

485 紫のにはひふかめて藤浪のなみにこえたる水莖の跡

相國寺惟明長老の梅のかたに

486 降かかず雪はいとはじ色よりも香こそめでつれ窓の

梅が枝

源義家朝臣のなこそその關のかたに

487 千萬のあだにむかへるものゝふも花さそふ風はすべ

なかりけり

月すめる河づらに柳あるかた

488 月すめる六田のよどは陰ひたす柳の糸のよるも見よ

とか

蒲萄のかた

489 羨し千々のねがひのひとつだになることかたきみさ

へある世に

實 船

賀茂季鷹和歌集

490 舟の中にもゝのたからはみちにたり千世のよはひや

つみ添てまし

李太白

491 わき出る君がこゝ葉の泉こそ酒よりもげにはかりし

られね

劉伯倫

492 一つきの酒に七の實をもちへし心はくみて杜しれ

福祿壽

493 人みなほりする三の幸をとりよろひたるこれの翁

か

班婕妤

494 ねやのうちの扇も今は名のみにて我身をさらね袖の

秋風

官 女

495 をみなべしいかなる種をとればかも雲の上にはさき

にほふらん

女三宮

496 から猫のからき思ひにかしは木の森の下露消かへり

つゝ

龜

497 ひちりこに尾をひく龜の心をばこゝろとなさば命長

けん

野馬

498 むさし野の月毛の駒も草を出草に入てやふしどしむ

らん

范蠡か魚腹さきてみそかぶみこむるかた

499 いをのはらさぎしのみかは身をもまた粉にくだきて

ぞこどはなしける

達磨のかた

500 道々の法の外なるのりをまた心とうるもこゝろなら

ずや

松陰に鶴のおりあるかた

501 ちよに千世を重ねたり共見ゆるかな松の木陰の鶴の

毛衣

わらはべのあそべるかた

502 天地のなしのまゝなるうなゐ子の心をつひのこゝろ

どもがな

伏見の里に土人形をひさぐを見て

503 とほつおやのはにしのわざをすが原や伏見てふ名は

同じ里人

若山滋古が初てとひ來てさよ更るまでかたらふ

に螢のおほくすだきければ 飛かよふ螢とゝも

に我もまた清きながれをたづねてぞこしといへ

るに

504 飛ぶ螢川瀬の水の音ならで何をか見せん夜半の縣居

江戸に有し比橘千蔭 天下名はなりぬべし千早

振わけいかづちの神の宮人と有しかへし

505 よしや名はなりもならずも花をめで紅葉にそみて我

世つくさん

栗田宮の御園なる笈の中といふ萩を見て

506 ひと本の萩にもしるし世を安くすゝも捨ぬ風流心

は

浦に鶴のむれたる所

507 あしわかぬ浦わのたづのうらとけてゆたに遊ぶや千

世の友どち

播磨國號の長歌をその國の佐用の里人平田幸夫

がよみて見せけるに

508 みかしほのはりまてふ國の名もしるくみちたらはせ

し上つ代のこと

隈川春雄が大宮の家にはじめてとひし時 賀茂

川の清きながれを柴の戸にけふせき入しことぞ

うれしきとよみて見せけるに大宮の町名はいに

しへ我賀茂の往來の大路なることを思ひ出て

509 町の名も我大宮の名にしおへば君がすみかをよそに

見ましや

六歌仙のかた

510 言葉の姿はむつにかはれどもひとつ心のたねならぬ

かは

賀茂季鷹和歌集

西行法師

511 色も香も捨てはてし身にみやびたる詞の花は猶残りけ

り

牛若丸

512 うず櫻くらまの山に咲しより八島にみちてにほふ春

風

常盤前

513 もえ出む春まつ霜の小草とて操にかへておほふ常盤

木

源頼政朝臣

514 郭公雲井に高くきこえあげし聲さへ名さへとゞろく

が如

小野小町

515 いざといひし縣見にゆかばうき草のうきしよごとは

根を絶てまし

親

516 子を思ふ親の心は人の子のおやとなりてぞ思ひ知け

る

雲錦翁嘉集 四

雲錦集 卷四

羈旅歌

八月十五夜の月見んとて須磨赤石に下りし時その
かみ平忠盛朝臣の浪ばかりこそよると見えし
かとよまれしを思ひ出て

517 赤石がた沖靜なる月影に波もよるとは見えぬ空かな

鹿島香取社にまうで侍りし時木おろしといふ所

より舟にて下るに九月十三日夜月を見て

518 不盡筑波あらそひ立る吾妻路の刀禰の川瀬に月をみる哉

三河國荊屋の古城にいますかる土井利徳君をと

ひまゐらせて去年あづまにしてのたまひ契りし

ことを思ひ出て

519 旅衣立ぞよりける御狩はの春のけしきも見まくほし
さに

御かへし 殊更に分るもうれし春の野の狩場の

きす友したふころ

不盡山に登りけるに麓より雲のおこりけるが見

るうちに立のぼれるを

520 ますらをのたけき心はおこせども雲のあしにはおよ

ばざりけり

甲斐國より相模のくに、越ける時三坂といふ山

にて

521 不盡の嶺をそがひに見つゝ分のぼる山は高ねも麓也

けり

笛吹川にて

522 波の音も秋のしらべと成にけり笛吹川の水の朝風

初雁の里にて

523 いつの世にたが聞そめて名付けんあら山中の初かり

の里

伊勢に下りける道にて

524 いづくよりいづくとどふをよすがにてやがて馴ぬる

旅の友哉

旅のやどりにあやめの枕ゆふとて

525 旅ねして草ひき結ぶ枕にはけふの菖蒲もわかれざり

鳧

難波に下りし比赤石に行んとするに雨いたう降

し日井辻尙覽がもとにて

526 たゞふりにふりぬる雨は石土古事學ぶまじおなれば

か

といひしかば尙覽 降雨にふること忍ぶ今日し

もぞ道をあかしに君が行なる

旅宿雨

527 よしやふれ草の枕の夜の雨さらばかわく袖の露か

は

旅宿夢

528 分わびし野山ともなく故郷に行かふ物は夢にぞ有ける

離別歌

はたちばかりの比より吾妻に下りて住けるにえ

さらぬ事有て賀茂に歸るに千蔭春海躬弦などを

はじめて人々別をゝしみて深川といふ所にてう

まのはなむけすとてあまた集ひて歌よみける次

手に

529 住かへてこゝらとし經し故郷は行とやいはんかへる

とやいはん

同じをり當座に

530 あづま路も都の空も戀しきは二子の山をゆけばなり

けり

歳の暮に谷川士逸翁伊勢に歸りて春はとくのぼ

り侍らんと有に

531 あら玉の年も今年はをしかからで君こん春を待やわた

らん

遣唐使餞別の心を

532 かどにめでゝ高き官はたびぬともかへさひまをしと

くかへれ君

江戸を立ける日いさゝか雨降ければ上杉殿につ
かふまつれる女房幸子のもとより 空だにも君
がわかれやをしむらん泪にゝたる夜はのむらさ
めといひおこせければ

533 君がをしむ涙の雨と聞からにぬるゝ旅路の袖もいと
はじ

氣比宮つこ石塚嚴麿が始て來りてしはす朔日ば
かり國にかへるを送るとて

534 みあれ野のあふ日は夢のこゝちしてかへる山こそ誠
也けれ

双林寺の崇順法師河内國交野渚院にしばしうつ
りすまんとて別を告るに

535 あふ事のかた野ながらに君も又かりにと聞ぞかつは
なぐさむ

536 三月末つかた但馬國茂濟が國にかへるに
花とりの春のなごりにそへて又君が別ををしむけふ

哉

(池田齊邦)
因幡侍從殿の旅だち給ふうまの餞別に扇掛をま
ゐらすとてそへたりし歌

537 あふぎてふ名をば頼て君がゆくいなばの山のまつと
しらなん

勅使にしたがひて菅原雪臣が江戸に下りける馬
のはなむけに

538 むさし野に行としきけどかぎりある旅ぞと思ばかつ
はなぐさむ

哀傷歌

妙法院宮世をはやうせさせ給ひしをなげき奉る
比御園の花を見侍りて

539 見し君がなき春としも御園生の花はしらでや咲匂ふ
らん

猪苗代謙宜法眼は我いと若かりし時より此道の
友どちにて吾妻に住し比も年ごとにかしこに下

りて歌よみ連歌しけるにまして賀茂に歸り上り
て後は夜晝となく月雪にむつびかはしゝをこと

(享和三年)

し六月晦日ばかりみまかりにければかのなきが
らを京極四條わたり大雲院にをさむと聞てそこ
にまうでゝよみて手向ける

540 筑波禰のこのもかのもに馴しよを思ひつらねてしの
ふいにしへ

彼法眼のかたみに見よとて謙庭法橋よりあぶ隈
川の埋木して調じゝ硯箱を贈れりし返事をやが

て其硯して書て奥に

541 夢を今は波のよるゝ頼みつゝ硯の海の見るめから

ばや

見子君の身まかり給ふけるよしさえ子のもとよ
りいひおこせたまひければ

542 今朝までは猶さりとともたのみにきこはいかにせむ

三島自寛が妻の身まかりける時

賀茂季鷹和歌集

543 何事も人におくるゝ身にしあれどなげき計はおとら
ざり鼻

若狹なる石田千頤が身まかりしときゝて

544 老らくもいさまだしらぬ黄泉路をばいづこのをこの
人か教し

三宅行達の母の身まかりぬと聞て心にもあらず

とはぬよしいひ遣すとて

545 いむといふ神のいがきを越てしも君がなげきぞとは
まほしかる

萩原員衡主の母君のおもひにこもりおはするを

とひて

546 秋またで枯しはゝその陰とへば置所なき袖の露かな

定就主の母都自房子の身まかりし後親しかりし
人々を集て後のわざし給ふに夕落葉といふ題に

て

547 朝露の日を経て染しもみち葉をやすくもさそふ夕嵐

哉

丹後國人三丸が秋の夕の發句に 音のする雨さ

へふらぬ秋のくれといひていく程なく身まかれ

りけるを親しくせし人々後のわざすとて歌乞け

れば

548 在し世をしのぶ夕の袂には音せぬ雨や降しきるらん

土州侯一周忌寄月無常

549 はがなくて入にし月をしたひつゝやみにまどふも幾

程の身ぞ

懷舊歌

文政十二年八月九日 妙法院故一品宮眞仁法親

王廿五年の御忌に當らせ給ふよし 仰ごと侍り

しかば御墓にまうで侍りしにいましゝをりに

是も又昔にかへせ人皆の心を種の敷島の道と詠

じさせ給ひしを御みづから書て給りしをさらに

おもひ出侍りてよみて奉れる

550 石上ふるき世しのぶ人皆の光と君をあふがぬはなし

慈鎮大僧正六百年御忌に

551 今も世の民におほふや住そめし名もよし水の黒染の

袖

猪苗代兼載法橋の三百年忌に千句連歌を謙庭法

橋のせらるゝに

552 産の子のいや繼々に茂れとてかねてや植し言のはの

種

吾妻に住ける比廉顯縣主の三十三年の忌にあた

りければ秋の懷舊といふ題にて人々にもすゝめ

て都なる父のもとに贈る

553 思ひきや雲井の雁の玉章に昔をかけてしのぶべしと

は

季榮君の十七年の忌に

554 ながらへて君いまさばと明くれに思ふ心の外なかり

けり

むす女八十子が七めぐりに花をゝりて手向とて

結びつく

555 なでしこの花もまがきに残らずば何に心をなぐさめ

てまし

寛政八年正月四日敦直縣主の百五十年の忌に當
れりとて彼縣主の歳暮の歌に 樂みのある世中
の人並に老てはをしむ年の暮かなといふ歌をき
りて甲斐守保考縣主人々にすゝめて歌手むけら
るゝに杜宇呼名といふ題にて世の字をかうふら
せてよめとあるに

556 世々を経てふりせぬ名をもなゆる哉我神山のやま子

規

文化十年烏石辰が三十三年の忌を保足縣主のと
ぶらはるとて彼翁の八十までみわすゑまつる筆
硯紙墨四の神の御前にとよみし歌を壁にかけて
人々集へられしに此歌を切字にてよみけるに
すの字を

557 すゑ遠く世に残れとて石にほり木にゑり残す水莖の

跡

賀茂季鷹和歌集

赤願縣主の歌の句を分て懷舊の心を人々よみし

時うすくこき

558 薄くこき世のまじらひはありなめどしのぶやひとつ

心成らん

おなじをり兼題寄月懷舊

559 ともに見し影ぞと思へば袖の露どひ来る月もなつか

しき哉

琴に名だゝる八橋檢校が百年の忌に當れりとて

長谷富檢校が歌すゝめければ

560 琴の音を聞しる人の絶ねばや年のを長く引傳ふらん

橋千蔭が十七年の忌にあたれりとて大堀正輔が

すゝめて月前思往事

561 むさしのゝうけらが花の露ごとに玉なす月をしきし

のびつゝ

雜體歌

有栖川入道一品宮に初春のほぎこと申まつる時

雪餅といふくだ物を奉るとてそを物名に

562 御園生の松の下枝に消殘る雪も千歳の春や契りし

御返し同じ物の名 忍びあへず今日見そめけり

梅花ふゆきも千世の春にわかえて

鷹司殿の常盤井どの、御園の撫子盛なるころ人

々かいつれてまうのぼりける時常盤井のみその
といふことをかくしてよめる

563 五月雨のをやみもしらず降時は蘭のみぞ殘る庭の池

水

有栖川宮の御前に孔雀ひえ鳥の居たるに此二ツ

を物の名によめと 仰を蒙りて

564 あなかしまひえどりちらし孔雀にくしや藏のうちに

入きて

文政十年霜月計濱松侍從殿深泥池わたりに鷹狩

におはし、につぐみを三十羽鳥付木に付て御得

物は多からめど、書てつぐみを物名に

565 池廣み居つく水鳥はさはなれど猶とりそへん君が家

づと

御かへしおなじ物の名 けふぞしる水沼にかづ

く水鳥にかくとりそふる心ふかさは

中務卿親王の御前に初春のほぎごと申まつる時

故一品宮にも奉りしことを思ひ出て雪餅といふ

くだものを奉るとてそを物名に

566 茂りあふ竹園生はかぞふ手のたゆきも千年萬代の春

大島右馬允むす子の着袴を甲子の日すとして大國

主の御かたを繪がゝせて歌こへるに

567 さか木のえねぎかけそむる白ゆふにしるぐも有哉千

世の行末

青木行敬家に集ひて當座に物名かるかや

568 みなづきの照日もしらずいかるがやとみの小川にけ

ふはくらしつ

千宗室家にて茶一ふぐといふことを物名に

569 去年降し雪だに消ぬみやま路やいつふく風に花の咲

らん

甲斐國布恩法師國に歸らるゝ馬のはなむけに加

賀烟草をおくるとてそを物のなに

570 我かたはこめて霞に見へずともそふるこゝろの立お

くれめや

安次縣主よりぬなはにそへて くちぬ名は千里

の海の外までもあるべき君をしたはざらめやと

有かへし同じ物名

571 君を我友ぞといかでおもふらん世々に朽せぬ名は持

ずして

つゝじをかくして春をゝしむこゝろを

572 咲殘る藤山吹を行春のなごりと見つゝしのぶころ哉

梶川常清がりまかりけるに鳥かぶとの花を瓶に

入けるを見てそを物名に

573 巢だちせぬ軒の雀をとり飼とあなかま騒ぐ里のうな

るい

幡枝圓通寺の花盛なりとて經茂縣主より 君も

又さそはれきませゆかではたえたへじとおもふ

賀茂季鷹和歌集

花の山路にとあるかへし

574 色も香もさぞなどぞおもふ世の塵は絶たる寺の山櫻

花

播磨の長治祐義が來りし時若狹の熊川葛をねり

て出しければそを物の名にして 松のみか岩の

上にも種おほくまかば楠とておひざらめやはと

よみて見せければかへし 同物名

575 言葉も心の種をはかりなくまかば奇しき花や咲らん

福井醫博士に杉火桶を贈るとてそを立入て

576 君にわが契おきてし秋もすぎ日をけふよめばもゝか

へにけり

月雪花

577 山ふかみたづきもしらず行かれて此夜は長しいかに

かもせん

弓箭弦的ゆかけ

578 大日本神代ゆかけて傳へつる雄々しき道ぞたゆみあ

らすな

鳥名十

579 うかりつる身をしわすれて終夜とひきし時をしきし
のびけり

魚名十

580 こひしきはいかにしてはたなぐさめんしひてむつば
んはせあゆめ駒

一二三四五

581 出てこし家路は遠し椿市にさむしこがらし心してふ
け

六七八九十

582 山しろく越路は千重に雪ふればかへさやいそぐつく
し船人

詠雪廻文歌

583 白雪はなへつゝめども小野山や野を求めつゝへなば
消らし

慈延法師に廿年ばかり隔てゝ嵐山の麓にてめぐ
り逢て詞をかけしに誰にかといへりければよみ

て見せし旋頭歌

584 面影はわすらるばかり老にたれども花を見る心は猶
もかはらざりけり

かへしせどう歌 かはたれとをしへし人のあれ
ばこそあれ君も又我面影を忘れやはせぬ

俳諧歌

二月はじめ窪御堂のとめこかしの梅を見にまか
りけるに門さしたりければ

585 あけよかし梅盛なる山里にとづるも門は折にこそよ
れ

橘千蔭がもとより撫子の種を乞におこせしにつ
かはすとして

586 都にて蝶よ花よとなでしこをあづま男の手にまかす
なり

富小路殿より猫子を給ひければ

587 雪の上近くうまれし猫子はちをはなちてぞ置べかり

ける

氷の上に蛙をかきしかた

588 あつ氷結びし日より水に住蛙も水をみずに住けり

子日の野邊に行んと出こし人々にそゝのかされ

て

589 春の野の子日にけふはいざといひて松より先に引れ

つる哉

残雪

590 年月は去年と暮てもものこれゝはゆきおくれぬといふ

べかりけり

長歌

掛卷裳恐起

院乃御門能六十乃御賀廻祈承李而社參志侍氣流

時廣前爾而思續侍歌并短歌

591 倭文當萬幾賤之起身春羅神山能山廻加飛有御代爾阿

比天あや爾恐幾美言能李宇け給半禮流此堂飛乃數爾

賀茂季鷹和歌集

盤茂連壽幣奉利木綿取志天々龜廻遠能岩根踏乍鶴が

岡乃松廻木陰乎立奈良新千年萬代久里か倍斯正木能

加豆羅眞幸天榮以末勢登祝詞讀歌奉理神離耳祈奉連

杼洞廻中乃堂豆爾茂我身志か禰伐也雲居爾聲能聞衣

佐留良牟

反歌

592 鶴龜乃千世萬代登幣無けて祈る誠は神ぞ知らむ

奉賀陸奥國守大祖母 藤夫人六旬鶴算歌并短歌

593 掛萬久母ゆゝ之きかも以はまくもあやに恐幾八隅志

ゝ吾大王の天下ま遠之堂ま倍る大殿にあれまし給ひ

内日刺都を出て鳥が啼吾妻のくにゝ國はしもさはに

あれども陸奥をしらし賜へる君にしもたぐ比たまへ

婆岩久やすかしこけれども御こゝろを芳野の川に梁

打ていを取折に拓枝と化てよりけむ仙女の昔もしる

く二並廻たちならびまし鳩鳥のおき長川の常とはに

絶ることなく宮城野の樹下露に民草も濡とほらんと

朝よひに禰宜まつり之乎いかさまにおもほしめせか

せの君も和久子の君も百萬千萬民を古衣うち捨てたま
ひひさかたの天しらせればす倍乎なみ幼きみまを雛
鳥の羽ぐゝみ給ひ樛木の彌繼つぎにつきませる家を
も名乎も安羅金乃地におと斜ず國安く蒼生乎おだし
久璞乃年を數多爾重つゝをさめ給へ婆物部は軻音た
て受久に民は腹鼓うち大船廻頼まつりて茹兒自物一
心に半布葛の伊夜東保長久仙女の經にけむ千歲萬代
にあえましゝて賢樹葉廻榮まさねと百傳六十乃今
日從祝喚鶏祈麻都禮りそこ遠志も於母契伐昔仙廻臺
と城乎ば釵太刀名に負勢氏之言乃よろの佐

反歌

594
雨の期止うるふ恵に知食國內ことぐあふがざらめ
や

俊成卿千載集選給倍る形を見て作歌

595
掛卷もあやに恐き皇祖の御言給はり風早の金葉にも
まさるべき詞の林分入て加きつめましゝ言葉は時雨
にあせず霜おけど枯るときなみ世々平經て千年の今

にいたるまでたゝへ序まつる千載てふゝみ
あづまよりあからさまに歸りのぼりて御社に詣
まつりてよみて奉りける歌并短歌

596
はゝそ葉の母が手はなれちゝのみの父にわかれてむ
らぎもの心にもあらず鳥が鳴あづまのくにゝはつか
なるゆかりもとめてすまひこし月日の數をおよびを
りかきかぞふればあら玉のとしも八とせに成にけり
かくても身にはあふひ草もとのねざしを忘れねばあ
け暮ひとりうちひさす都の空をあふぎつゝねぎのみ
かけし神山のやまのかひしもありそ海の深きめぐみ
しもらさねば賀茂の川浪立かへりつかへまつりて玉
くしげあけの衣もひとしほの色そふ春にあへるかし
こさ

反歌

597
さらに此春をむかへて一すぢにあふぐ心は神ぞしる
らん

わが賀茂大人はやくよりよみ出させ給つる花の雲の
にほひ深く紅葉のにしきのやしほにまさりしことの
はの散うせむはあたらしきわざなれば板にゑりて世
にとゞめばやと長治翁のとしごろまをし給へるをゆ
るし給はざりしにこたびしひてねぎたまへばいさゝ
かはとてあたへ給をついでをわかちて雲錦集と名づ
けたまふを拙き筆して書しるすは

隈川漁者 平春蔭

今は昔越中介直兄縣主今選任伊豫守中務少錄宗岡行達左兵

衛大尉宗岡行敬藤原康紀おのれ雪臣等つどひて大人
の詠草の打みだれたるを部をわかち書きよめよみあ
はせなどせしついでにうちくはかりて誰がしは序
かけくれがしは跋をなどさだめてさて板にゑるべく
やと雲師にきこゑしかばあざわらひてあなをさなの
いひごとや家集などいふものをすり巻にせむことは
もゝとせの後なりともなにかはおそからむざるを今

の世にはあはたゞしうさくら木を費やし剩序や跋や
こゝらことくしうかきつらねたる見る目もうるさ
くうたてしきが有をそれらがつらにおきなをもいれ
むとやあなをさなどむづかられて皆鼻突てひそまり
しは三十とせちかく耶成ぬらむそれよりこなたいひ
そゝのかす人はたなきにしもあらねど相はかりし友
はおほかたこの世の外の人となりて長らへたるはい
よの守とおのれのみなればすべなきをくちをしきこ
とと歎きわたりしをこたび長治のすけよしおりたち
てせちにこひ得てかくものせられしは花もみぢのし
た陰に立かくるゝどちのよろこびなりけりさてさき
にわなみらにはゆるされざりしことを此度すけよし
にしもうなづかれしはこのひとの齡のたかきと學の
薦たけたるところざしのまめなるとうちあひたる
つよさにはさすがにうしも負てゆるされしにこそと
なかくゝにたふとく且はこのこと思ひおこし乍はた
さで世をはやうせし人等も苔のしたに手うちて取よ

ろこぶらむとおもへばなみださしくむばかりうれしくてうめきいでし一言をやがてこゝにもものせよと人のいふまゝに書付しが跋文めけるをうしの見られなばうるさきことゝにがまれやせむあなかしこや

御室宮人 藤原雪臣

楓樹園藏

(編者藏本による)

香川大學神原文庫藏季鷹歌稿

たつのとしより巳の年うまのとし
よみうた

(天保345年)

あしひ れいやしう

あしみハ歌にハつゝじの事にいへればいつ方によみてもよろし

羊躑躅^{ヨウヂクショク}といふハ羊のくらへバ酔^{エヒ}てをどる故に云

叙野様御在所ゆらの戸のひのうた

ゆらのとに梶を絶しは昔にてやすらに渡るけふのたのしさ

天保六年五月十五日 正四位下加茂季鷹

八十三叟

冬山家

1 霜深き草の庵の冬はたゞはやく人めのかれにけるか

な よろし

2 あはれゝ今は風のみ音づれぬ人めも草もかれし筈

に よろし

3 山里は人めも草もかれはてゝ夕霜むすぶ風ぞ音なふ

よろし

炭がま

4 いつまでかよにすみがまとたのむらんはては煙となりぬる物を

然るべし

をし鳥

5 いたづらに友なきをしをの毛衣は氷の床にさえあかす

らし

6 池水にすむをし鳥のうきねかなあしのよどこの氷夜
すがら

寄木戀

7 朽やすき物ともしらで何にこのあさきの柱たのみそ
めけん

冬曙

8 くれ竹の末ばにつもる白雪のやがて氷れる朝あらし
かな

寄木戀

9 ありてしもかひなかりけりはつせ川またもあひみぬ
二もとの杉

豊明節會

10 をとめ子が天の羽衣つらねきて今のぼるらん雲のか
よひち

初雪

11 しぐれ行雲のかへしの山風に花かとみゆる雪もめづ

賀茂季鷹和歌集

らし

年内立春

12 年の内にけふこそ春はたづか弓くれ行年は引もとゞ
めず

13 猶殘る冬の日數は夫ながら春立けふの心のどけさ

歳暮

14 行かたを何かはかなくしのふらんとしは我身につも
れる物を

15 いそがずてしばしたゆたへ別なば今年の冬にまたも

あはめや

除夜

16 年をもし春もこひしとふたしへにしづ心なきけふに
も有かな

をし鳥

17 唐錦おりかけたりとみゆるまであやに愛たきをしの
毛衣

17 春の月はむめづるにや春の月をみれば

らん

18 あたらしき年にはあえて何にこの我みばかりやふり

19 梅花薫風 春の風は梅の香をふりまはす

まさるらん

よろしからん

25 ぬししらぬ宿の梢をとめきけり梅がさそふ風をし

19 鳥の音も行かふ人の音なかもことにきこゆる朝ぼら

26 山家早春 雪の谷の氷はさながらにかすむ空に春をこそ

けかな

ク

山家早春

27 よのほどのねぐらの竹をふりうづむ雪よりもるゝ鶯

雪申子日

ク

28 おしなべて春とはしるしさは姫の霞の衣立そめしよ

20 ふる雪に花かづらせり子日するのべの小松のふたば

29 あま人のしほやき衣おさをあらみ問遠に霞む春の浦

ながらに

然るべし

雪中鶯

30 春の月 春の月をみれば

21 鶯の初音の春の野べみればはやも霞のたな引にけり

31 春の月 春の月をみれば

よろしからん

の聲

32 春の月 春の月をみれば

若な

霞

33 春の月 春の月をみれば

22 ふる年の雪もけなくいとはやも春の色なるわかな

34 春の月 春の月をみれば

つみけり

ク

35 春の月 春の月をみれば

23 みな人の霞の衣はるはきてすそのゝ原の若なつみけ

浦霞

36 春の月 春の月をみれば

り

ク

37 春の月 春の月をみれば

早春水

ク

なみ

38 春の月 春の月をみれば

24 池のおもになみの初花うちいでぬ水の心や春をしる

春月

39 春の月 春の月をみれば

30 詠れば老の心の臚より霞むとやみる春のよのつき

然るべし

31 愛てかく老と也てもあくよなきかげは臚の春のよの

月
よろしからん

32 春雨にくる人もなく軒ばなる柳の枝をつどふいと水

然るべし

33 古宅梅の影はふりせせて昔のまゝの色香

にぞさく
よろしからん

34 夕霞の影はふりせせて昔のまゝの色香

35 ぬれせば入日のかげもほのゝとかすみにけりな遠

の山のは

春雪

36 太空はかすみもやらず打きらしこのめはるともわか

ぬ雪かな

古郷

賀茂季鷹和歌集

36 古郷とあれし昔のかたみこそ今もかはらぬ月には有

けれ
よろし

春山家

37 山ざとの垣ねの小草ももへ初ぬ人めはしらず春は來

にけり

年の暮れ

38 只過にすぎ行ものはゆく川のかへらぬ水と年と也け

り

わらび

39 春の日にやもえ出る早わらびのをりすごさじと野

べにぎにけり

雨中雁

40 契あれば心にもあらで歸雁なみだやけきの雨とふり

けん

春風

41 いひしらぬ香をさそへばぞいとふべき梅にいとほぬ

庭のはる風
よろしからん

庭梅

42 梅の花さきのさかりをとへかしと宿のしるべの庭のはるかぜ

春雨

43 春雨のはれぬながめに袖ぬれぬいたづらによにふりにける身は

44 はれやらぬながめ也けりすがのねの長き春日の軒の玉水 然るべし

歸雁

45 古郷にきてかへればか梓弓春はかすみのころもかりがね

若草

46 おしなべてみどりになりぬきのふ迄むらくみえしのべの若くさ よろしからん

春浦

47 うらくと霞鹽ちの春の風浪にちりくるはなざくらかな よろし

炭がま

48 をの山や雪をしのぎて炭がまのけふりもけさは心細しや 然るべし

柳隨風

49 よりてかはたれもみるらん霞たえまの青柳の糸

梅おほかるその

50 ちりくるも雪かはあやな香をこめて千もとの梅の花

の下風

51 驚も千もとの梅の花がさをぬふてふわざやいとなかるらん よろしからん

寄泪戀

52 つくめどもうきにはあへぬなみだかなみだれてよそにみえもこそすれ 然るべし

寄鏡戀

53 みし人のおもかげもなしますかみたれに心のうつり行けん よろしからん

寄玉章

54 いつはりのたゞ一筆の玉章もかき絶にける身の契り
かな ことよろし

但五句今よしあるべし

寄繪戀

55 わきかへる心を人のしらねばや繪に書瀧のさてつれ
もなし 前に同じ

寄繩戀

56 いせの海あまのたく繩一すちにくるしきものは戀に
ぞありける よろしからん

寄春

57 かくばかりうつろひやすき花の色に人の心のならは
ずもがな

58 逢坂のせきちへだつる霞こそつれなき人の心也けり

いとよろし

寄秋

59 秋風の日毎にふけば床はあれてわがみうつらの音を

のみぞなく よろし

寄冬

60 こがれぬるおもひもしらでうち川のいづれにひをの
よりてこざらん よろし

餘寒

61 ひもどきし浪の初花又更にむすばれぬるきざらぎ
の空 ことよろし

春水

62 池のおもに浪の初花うちいでぬ水の心や春をしるら
ん ことよろし

春霜

63 春はまた淺澤小野をみ渡せばかれ生に霜の花はみえ
けり いとよろし

夢

64 ぬるも夢覺るも夢のよの中に何をうつとどわきてい
はまし いとよろし

旅

65 めづらしき野山をみつゝ愛て行旅をうき物と何かい
はまし
よろしからん

眺望

66 住の江の霞吹とく浦風にほのみえ初るあはぢ嶋山
よろし

待花

67 花を待心は雲にあらねどもやまのはごとにかゝりぬ
るかな
よろし

花未不開

68 あすはまたいづれの枝かさき初んふゝめる花のなつ
かしきかな
いとよろし

69 待わぶる心しらじなあひおもひでひもときそめよや
ま櫻ばな
よろし

花將散ハサナト

70 ちりそめんことをなるゝはあやにくに一木のはなに
春風ぞふく
よろしからん

花盛

71 物おもひなくて盛の花をみつくながらよを過して
しがな
いとよろし

72 年ごとに花みぬ春はなけれどもかゝる盛にまたもあ
はめや
よろし

寄夏戀

73 よもすがらもゆる螢に身なしておもひを人にしらせ
てしがな
ことよろし

遅日

74 忘れてはけさをきのふとたどる哉まどくれがたき春
の日がげに
いとよろし

野遊

75 蕨折すみれつみつゝすがのねの長き春日をのべにく
らしつ
よろし

76 おも引若なもつみしのべにまたすみれつくしとあか
ぬけふかな
よろし

春川

77 山風に花吹ちらす川のせに櫻をよせて波に立ぬる

花將散

よろしからん

78 櫻色に染し心はちらなくにちり初んとやうつろひぬ

らん

然るべし

遅日

79 人もとひこぬ山里は侘つゝぞをる長き春日

と

同寄露

80 草のうへの露に宿りてすむ月の風吹ごとに影こぼれ

つゝ

よろしからん

寄花述懷

81 花みれば物おもひなし何かいはんやがてうつろふ物

と思へば

よろしからん

82 はかなさをたぐへてみればあはれくうつせみのよ

と花と也けり

よろしからん

すみだ川の花

83 遠かたにあわ立雲とみつゝゆけばすだのつゝみの花

にぞ有ける

84 都鳥ことゝひてまし都にもかゝる験のありやなしや

と

藤

85 露霜にかはらぬ色の山松をむらごに染てかゝる藤な

み

よろじ

待花

86 足引の山の白雲ながめけり花特色のこゝろすぎみに

よろしからん

つくし

87 みやまちを愛つゝぞゆくなつかしきいもがあかにも

似つゝじの花

苗代

88 山吹の下行水をせきいれて苗代いそぐ井手のさと人

いとよろし

山吹

89 残りつる夏はいく日もあらじとはいはねどしるし山

吹の花

いとよろし

90 よひのな名残の露に打しめりえもいひしらぬ山吹
の花

よろしからん

蛙

91 せき入し苗代水のにごる瀬に物佗しげになくかわつ
かな

庭落花

92 とふ人も道まどふまで我宿にちりかひくもる花の白

露

よろし

93 ちる花にはかなくたぐふ心かなわれ春風にあらぬ物
から

然るべし

山雪

94 とよらなるかねの響もこもりくの初瀬の山の雪のあ
けぼの

よろしからん

夜雪

95 あつぶすまかさねてぬれど雪のよやすきまの風も寒
くこそあれ

浦雪

96 立千鳥つばさもたわに白妙の露吹送るすまの浦風

里雪

97 布さらすむかしもかくやみえつらん初雪白し玉川の
さと

よろしからん

98 みし秋の鶉が床の跡もなし雪のみけさは深草のさと

よろし

庭落葉藏水

99 ちりつもるもみちになりておぼしまの下行水は色な

かりけり

よろしからん

古郷

100 あれにけり櫻は雪とふりかはりいくよへぬらんしが
の宮ちは

よろしからん

寄玉戀

101 逢ことは心細くも緒絶して泪の玉の袖にみだるゝ

よろしからん

寄網代

102 わすらるゝ身をうち川の網代もりひをのよるせの絶
はてしより よろし

酒

103 よの中
一つきのうさもわすれじ一つきのにこれる酒のなか
らましかば よろしからん

不逢戀

104 うらみてもあはちのうらのうつせがひむなしき名の
み立んとすらん

山家

105 住は猶うきよ也けりよそながらおもひの外のみねの
嵐に

冬野

106 此ころはのべも人めもかれはてし霜に草ばの冬籠り
せり

早梅

107 我宿の春おもほゆる梅が香は鶯さそへとしのこなた
に

除夜

108 みにかへてをしとこそおもへけふの日の冬もいまは
の夕ぐれの空

としくれて竹ある家

109 我宿の竹をねぐらの鶯とともに一よの春をこそまで

ねはん會

110 照月の光残して鶯の山雲隠れにしけふにやはあらぬ

ことによりし

如是東行心を

111 ひんがしに御法の水のながれずばうかぶをしらでし
づみはつべき

いとよろし

餘寒

112 にほはずば梅ちる風に袖さえて雪とのみこそおもひ
はつべき

いとよろし

浦霞

113 こゝもとによる白浪の音はして八十嶋霞む春の曙

よろし

莊周のかたかけるに

114 ねぬるまの花にたはれしこてふにてよは夢ながら過

じてしがな

よろし

樵夫

115 人しらぬみやまのおくにたが爲かなげきこりつみよ

をつくすらん

よろし

きさらぎの末鶯のはつねをきいて

116 手を折ば春はなかばに也にけり心おそさの鶯の聲

いとよろし

妓王の姿に

117 秋風におどろかさされて春の夢さめしうきよのさがの

あはくれ

よろしからん

佛御前

118 もろともにさゆるゆふべを契らまし同じのぼらの草

の上のつゆ

よろし

雨中鶯

119 さく梅をぬふてふ笠にかくれてや雨にしほれぬ鶯の

こゑ

いとよろし

鶯

120 梅になれ柳がえだにこづたひて今を春べとうぐひす

のなく

よろし

となりのうめ

121 花みれば心へだてぬ中垣のこなたにさそふうめの下

風

よろし

雨中歸雁

122 今はとてなきてわかるゝ雁がねのつばさしほれて春

雨ぞふる

よろし

寄月釋教

123 西へ行月に心はたぐへけりみのうき雲はさもあらば

あれ

いとよろし

霞遠樹をへだつ

124 めなれしに柳櫻をみわたせば春のにしきをたつ霞か

な

よろしからん

くづつ

125 うら風によせてはかへるあら浪のかはる枕のうきね

をぞする

よろし

126 うらなみにつなぐぬ舟のこゝちしてうきても人をま

たぬよぞなき

よろしからん

近きあたりの梅そのを

127 かずぐの梅のにほひを袖のうへにとりあつめたる

春風ぞふく

暮春山

128 ちりはてし花をしのぶるつまなれやわすれがたみの

みねの白雲

よろし

129 今も猶花にかよひしおもかけみせつさかぬまの花に

まがひしみねの白雲

いとよろし

硯

130 かくあらためは
いまもまた硯の海に書ならずもくずや代々のかたみ
みるめかる

ならまし

初句改めばよき御歌也

筆

131 から人の手にとる筆に花さくとみせしは春の夢とこ

そきけ

よろしからん

いぬのかたかけるに

132 よるとなくひるともつかずいもねずてかどもるいぬ

やしづ心なき

よろしからん

是まで春廿三首
はるの野

133 みわたせばすな花さく春の野をふりすてがたくま

ふこてふかな

よろしからん

雨中花

134 きてみれば花の衣をはるの雨かをるしづくぞ袖にか

ゝれる

よろしからん

135 いろも香もいまひとしほにまさりけり雨にぞ花はみ

るべかりけり

よろし

136 春雨にいろます花のしづくにぞぬるゝもうれし春の

衣手

いとよろし

上野の花を

137 おもふことなくてぞみつるよのなかのちりの外なる

山櫻ばな

いとよろし

138 けふみずは雪とふるべきおもかけをしのぶかをりの

花の下かけ

よろし

都鄙花

139 都人がざす手ぶりをなつかしみひなの櫻をゝりてこ

そみれ

よろしからん

禁中花

140 雲のうへに立そふ雲とみゆるかなみはしの櫻さきの

さかりは

よろし

古郷月

141 ふりにける志賀の都やとひてましむかしながらの月

にやはあらぬ

よろしからん

ある人の野あそびのかへさつくしを送りければ

142 春のゝ手にとる筆のかずくは心づくしのつとゝ

こそみれ

よろし

海のかすみ

143 わたの原かぎりも志らぬ朝かすみこぎ行舟のゆくへ

をぞ思ふ

よろしからん

里のかすみ

144 いぶせかるわらやもみえずなりにけり霞のいろやふ

かくさのさと

人の花をゝりておこせたりければ

145 いにしへもかゝるめでたき花をみて物思ひなしと人

のいひけん

花

146 袖のみか心にしみてあくよなき櫻は何の契りならら

ん

よろし

閑居梅

147 むかしおもふ草の庵の雨のよにしめりて袖にかよふ

梅が香

よろし

梅迎ウ

148 鶯をさそふしるべの春風に梅が香とめて君がきませ

る

よろしからん

糸櫻

149 すがのねのながき春日に糸櫻くりかへしつゝよりて

こそみれ

うませの

よろし

□ そのにうゑし櫻の初花を

150 ことしより春しり初し花をきみいくもゝとせのかざ

しにはせん

よろし

三月盡

151 花鳥のいろ音にあかぬ心より春の日數やみじかる

らん

いとよろし

152 きふといひけふはやよひもくれは鳥あやしきまで

に春ぞみじかき

よろし

花をゝしむ

153 あひおもはでちりぬるものをいかなればうたても花

をゝしとおもへる

よろしからん

154 をしまじとおもひすてゝも散花にまづさそはるゝ心

あやしも

よろし

遠花

155 遠かたの高根まじろになりにけり雲か櫻かいざゆき

てみん

つゝじ

156 いへばえに岩ねのつゝじいはでのみ何のおもひの色

にさくらん

よろしからん

三月盡

157 花の色にならひやしけん春も今うつりやすくもくる

ゝ月日は

よろし

雨中三月盡

158 さらぬだに春のわかれに袖ぬれぬ日をふる雨のおや

みだにせよ

よろしからん

三月盡

159 わかれゆく春のゆくへは白雲のむなしき空ぞながめ

られつゝ

よろしからん

160 しるしなき物おもひをりあぢきなくをしむにとまる

春ならなくに

よろしからん

161 花はねに鳥はふるすに春といふ名にさへけふはわか

れぬるかな

よろしからん

162 只過に春はながれて行川のかへらぬ水のなごりをぞ

おもふ

よろしからん

163 ちり残る花をしみればゆく春の山にやしばしやすら

ひぬらん

よろしからん

寄花祝

164 萬代の春をゆかしとちぎらなんあくよもあらぬ花の

色香に

然るべし

池邊藤

165 池水にいろなるあやは高はたの梢のふちのおるにぞ

ありける

よろしからん

166 影うつす池のふちなみしばくも立かへりつゝみて

をゆかまし

よろしからん

古宅のすみれ

167 わびしらにひとりすみれはさきにけり春やむかしと

あれしまがきに

よろしからん

すみれ

168 なつかしきすみれの花はくれてゆく春のかたみとき

ぬにすらまし

よろし

山ぶき

169 口なしの色もふかしな春もいまくるゝ籬の山ぶきの

はな

よろし

是迄六十首

灌佛

170 この花のうきよのやみをてらすかなけふみえそめし

月の光に

よろし

171 みほとけにそゝぎし水はけふも猶ながれて代々に絶

せざりけり

ことによろし

卯月四日旅行人に

172 夏ごろも立わかれても君をわがしのぶ心は薄からな

くに

よろしからん

うのはな

173 夕やみもたどらざりけり山里の道の行手にうつぎ咲

ころ

よろし

かひ

174 よせくるをひろひてみれば櫻色に春のかひある袖の

うらなみ

よろしからん

關

175 逢坂の關はあれけり今はたゞ岩もる水のもりあかす

のみ

〃

酒

176 たぐひなき玉はありとも一つきの酒にはかへんたか

らあらめや

〃

人の花みにゆくに

177 けふみずばあすかの山の櫻花よのまの風にちりもこ

そすれ

よろし

花未忘

178 ちりはてし梢を今もながめけり忘れがたみの花のお

もかげ

花をめづる

179 こんよには花にしみをばかへなましちりても人にあ

かれやはする

よろし

見花觀無常

180 うつせみのうきよの春のみじかさをねにかへる花の

をしへがほなる

よろしからん

更衣

181 ならひそとおもひのどめて花衣うすきかとりにけさ

ぞかへぬる

〃

待鴈

182 なかぬまはおぼつかなしや鴈聲せぬ夏はあらじとお

もへど

よろし

183 いつまでか待に心をつくせとやおもひくまなき山は

とゞぎす

184 山がつに身をもかへてん鴈はつねをはやもきかんと

おもへば

185 人づてを初音になしてきかぬ間のつらさをしばしな

ぐさめてまし

いとよろし

186 藤なみにわれあらなくにほとゝぎすまつにかゝりて

日をもふるかな

よろし

尋時鳥

187 待わびてたづぬる山のかひあらば一聲もがなやまほ
とゝぎす よろしからん

ほとゝぎす

188 ほとゝぎすいづらとみれば白雲の聲を残してゆくへ
しらずも よろしからん

うの花

189 月雪のいろにかよひてさきぬるをあなうの花と何か
いはまし

旅空鴈

190 古郷をしげくこひつゝ夏草をむすぶ枕になく時鳥
よろしからん

191 わが袖のなみだをかりて鴈よふかき草のまくらをぞ
とふ よろし

曉にほとゝぎすを一聲きくと人のいへれば

192 玉くしげあくるもそらに鴈二こゑきくといふぞうれ
しき よろしからん

月前鴈

193 みづ枝さす月の桂の影とめて聲もすゞしき山ほとゝ
ぎす よろし

夏風

194 夏衣たつより風ぞなつかしき花にうかりし恨わすれ
て よろし

鶴

195 更行ばみぎはのあしのねにたちしひがたにかへるた
づむらの聲 よろしからん

わすれぐさ

196 うきことをわするゝ草のおひぬればすみよしとこそ
あまはいひけめ よろし

立花

197 手枕の夢もうつゝもむかしへを花たちばなぞしのぶ
べきなる よろし

夕まつり

198 すが／＼しかもの宮人神山のけふにあふひのもちか
づらせり よろし

閑居夏草

199 拂はねば心のまゝにしげりつゝ葎は宿の窓とちてけ

り

よろし

なでしこ

200 もろこしにたぐひもあらじ花の色のえもいひしらぬ

やまとなでしこ

よろしからん

水邊蛙

201 せきいるゝ苗代水にきそひつゝなくやかはづの聲も

にこらず

いとよろし

戀

202 あふことはかたのゝ浦のうつせがひむなしき後の名

ばたちしかど

よろし

いし

203 八千代へていはほとならんさゞれ石のなみにひかる

ゝ心かろさよ

いとよろし

204 契りありてたれかみるらんさゞれ石のいはほとなり

てこけのむすよを

よろし

くりの花

205 さみだれにみだれにけりな山里の軒ばにしげきさゝ

くりの花

よろし

述懷

206 ともすれば物おもふかなあぢきなくて有身の有

はあるかは

よろしからん

う月十日なき人をおもひて

207 なき人のおもかげしのぶつまなれやうきうの花の忘

れがたみは

よろしからん

廿六首

雲間鰯

208 入日さすとよはた雲に鰯こよひの月を契りてやな

く

いとよろし

209 うすはたの雲の衣をたてぬきに山時鳥おりはへてな

く

いとよろし

舟中鰯

210 時鳥聲をながせる川水に心ゆきたる舟のみちがな

いとよろし

雨中鴈

211 うきことをしのびねになく鴈なみだやそふる村雨の

空

よろしからん

社頭鴈

212 神垣にうつぎさきけり白妙のゆふかけてなけ山ほと

ゝぎす

然るべし

遠鴈

213 鴈くもゐに遠き一聲にやがて心ぞそらになりぬる

よろし

江鴈

214 住の江のまつにかひある鴈あわお嶋より鳴てきにけ

り

よろしからん

五月ふたつあるとし鴈を

215 鴈しのふるころはさもあらばあれ後の五月も聲なを

しみそ

よろしからん

216 鴈ねながく契れ引残る後の五月の池のあやめに

よろしからん

夏 祝

217 千まち田のやへがたりほを契りつゝうゐるさなへは

君が代の爲

よろし

麥

218 鴈なみだやそめし山はたの麥のほだちは色付にけり

よろし

五月五日

219 長きねをいつかと待しあやめ草のきばのつまにけふ

こそはみれ

然るべし

山家うのはな

220 時わかぬみやまのいほも咲しより夏とはしるし垣の

卯花

よろしからん

すみだ河の花を

221 櫻ばなみる春ごとの大君のみたまのふゆをあふがざ

らめや

よろしからん

おなじ所落花

222 すみだ河こぎ行舟のあとみえて堤のさくらちりとち

りくる
らんも

いはでしのお戀

223 みちのくのいはでしのぶのさとへば心のおくの名

にこそ有けれ
よろし

224 いえばえにいはでしのぶのくるしさをまづしるもの

はなみだ也けり
よろし

225 みちのくのいはでしのぶのすり衣したにみだれて人

もこそしれ
よろし

寄泪戀

226 人めをばつゝみはてんとしのべども落ちるなみだい

かにしてまし
然るべし

絶戀

227 あぶさかの關の清水のよどみつゝ影さへみへず袖ぬ

らすかな
よろしからん

逢夢戀

228 さだかなる夢の名残のおもかけはうつゝならぬはせ

んすべもなし
然るべし

書をかへす戀

229 濱千鳥あとをとゞめずかへすなみの立ゐになきてよ

をつくせとや
〃

230 渡るべきよすがとたのむ丸木ばしふみかへすにぞお

どろかれぬる
〃

寄鏡戀

231 うつり行影さへ絶てつれなさのますみのかゞみみる

にくもれり
〃

うたがふ戀

232 おぼつかない契りしけふはくれば鳥あやしや人のかは

る心は

五月鰯

233 ほとゝぎす花橘におとづれぬうゑし昔の人や戀しき

よろしからん

ともし

234 さつきやみともしにこがれよる鹿をまつとせしまに

あけぬこのよは
よろしからん

もほえずして
よろしからん

235 五月五日旅のやどりをおもひやりて
旅衣うらめづらしくたがさとにあやめの枕けふはゆ

ふらん
よろしからん

水 鶏

236 うたゝねの夢おどろかすくひなかなならず人を待

身ならねど
よろしからん

般若心經色卽是空

237 有とのみながむる空のうき雲はまだはれぬまの心な

りけり
ことよろし

心地觀經 父母の恩といふ心を

238 かぞいろの恵に人となる澤のふじのたかねも高から

なく
ことよろし

觀普賢經樂罪如霜露の心を

239 朝彦の光りにあへば露霜とつくれるつみのきへざら

めやは
いとよろし

法花經序品未嘗睡眠の心を

240 つとめけり御法の文にいそはしもぬるてふことはお

對泉待月（以下六首ミセケチ）

241 袖ひちて月待ほどの手ずさみにいは井の清水いく結

びしつ

社頭夏月

242 廣前のま 白き月かけを行あひのまの霜とこそみ

れ

隣家蚊火

243 へだてなくよそのかやりのくゆり來て月みる宿の軒

をかすむる

寄田戀

244 契りしをたゞかりそめとしらませばいたづらいねの

數をつまめや

獨 戀

245 もしほつみうきめかづけるあまの袖うらみにしばし

かはく間やある

變 戀

246 かねごとは夢に也けりあひみてし昔がたりはうつゝ
なれども

百一首よろしといふ分

元日

247 天の戸のおしあけがたの春霞立こそけきのしるしな
るらめ

よろしからん

248 む月立けふぞうれしきかくながらうつせみのは過し
てしがな

然るべし

249 ほのゝと霞の衣たちそめてうら珍らしきけきの空
かな

よろしからん

若水

250 春風にとくる水をさながらにけさ若水に結びそめけ
り

〃

古郷

251 あれにける志賀のみやちの花のみかむかしながらの
山のはの月

よろしからん

歸雁

252 契りあればなきて別るゝ雁がねにわが袖ぬらすあけ
ほのゝ空

然るべし

残雪

253 若草のもゆるのゝへの朝日影つれなく残る雪のむら
ぎえ

よろしからん

除夜

254 はかなくて過し月日をかぞふればけふは物おもふと
しのくれかな

然るべし

255 眞帆かけて浪ちをはやくゆく舟とくれ行としといづ
れまされり

よろしからん

寄葵戀

256 ふたばより心のつまにかけ初てあふひを神にいのり
渡りし

〃

山家

257 もろともに見てし昔をかたらはんわれより外に住人
もがな

〃

ふすま

258 よもすがらさへこそまされあつぶすまかさねても猶

ひとりぬるよは

猿

259 山風のさそふにもれてちりはてしこずゑに残るこの

は猿かな

然るべし

260 霜さゆる岩ねをみがく月更て物佗しげにましら鳴也

よろしからん

春 瀧

261 山のはの霞のひまをもれきつゝ岩ねに瀧の玉ぞみだ

るゝ

よろしからん

元日述懷

262 物ごとのあらたまりぬる春にあへど心おそさのなど

かはらざる

然るべし

右の歌稿は、タテ二四・四糧、ヨコ一九・七糧、楮紙袋綴季鷹自筆の歌稿で、墨付二十枚、季鷹の晩年の筆として注目せられる。香川大學圖書館の御配慮に負うものである。

美阿禮の百くさ

賀茂季鷹縣主歌

美阿禮の百くさ

明遠堂藏板

千はやふる神山の麓に芳野たつ田の花紅葉をうつし植て雲かとおほえ錦と見給ひけむためし香はしめる吾師雲錦翁は音にきく江家の書庫にもをさく／＼おとらぬまで倭漢のふみをくらにこめてさて其書ともみな考へたゝして頭に傍に筆そへられたるも亦花紅葉の雲錦をなむなせりける年ころよまれたる歌ともはた雲となひき錦とまかへればこよなき馬くるま門にたえす遠近人あしたゆく來つとひてしるもしらぬも其花を折り錦をもてはやさゝるはあらさりけり齡すてに八十に餘りて耳こそは遠かりけます／＼文手はみさかりに執てつかの

まのいとまもあらざりければ月雪のをりにふれた
る歌ともはとかくによみ捨て懇に書とゝめなどは
せられざりけりされは世にはやく聞えたるをのみ
誰もあかす需めみつからもさるかたに馴て物せら
れにければいつこにも同じ花の雲匂はぬ限なむな
きされは此ころ難波大城におはせる大久保教孝朝
臣の御中やとりちかくひさしうにて参り歌よみな
としてあるに朝臣のたまひおこせたる雲錦のをち
の短さく三十ひら餘りもたるか世にしられたる紅
葉のにしきともにてこもめてたからすはあらされ
とと同じくは普く世にしらて翁も忘れたるらん多か
めりそれ埋れなむも口をしいかて此ありふる錦に
めなれぬ雲を交へて此ころ過さて一巻となして見
せねと井出尙監とおのれ直兄とにあつらへ給ふに
ゆくりなきことなりければさるへきしをりもなく
木かくれもとめなんだつきもあらざりけり先つこ
ろ播磨人のひそかに櫻木にゑらせし雲錦集にもも

れたるあり寫しひかめたるも交れゝはそれ見あは
すへうもなくて漂ふ雲のおほろかなれとかりそめ
に百首となしみあれのもゝくさと名つけて尙監に
清書せさせてなむたてまつるもとよりあまたのこ
れらむは花の雲かさねて物してましこはたゝけし
き計なるにしきの裁出にこそあなかしこ

天保七年かみな月のはしめ浪速の旅のやとりに
してしるす

正四位下伊豫守賀茂直兄

春歌

元日

1 あづさ弓はるたつけさのこゝろもて年の一とせず
してしがな

子日

2 子日していはふ二葉のひめ小まついづこにこもる千
歳なるらん

都 霞

をいれめや

3 もゝしきのおほみや人の袖かけてかすむみやこの山
しづかなり

春日望山

9 かくれ住こゝろもしらでうめが香やとほくみやこの
人さそひけむ

4 朝日さすあたこの高嶺雪きえてかへり見すればかす
むおほ日枝

野外春望

妙法院宮に始めてめされて春風先發苑中梅といふ
御題をたまはれるに此宮は古風を好ませたまひ
ければよみて奉れる

5 あしびきの山はたそぼのくぬぎ木原それもはるには
もれぬいろかな

10 こと樹にもにほひをうつせうめが香をむかしにかへ
す園のはるかぜ

梅をかざして鶯を聞く

櫻

6 折かざすかしらの雪にうぐひすもいづれを梅とまど
ひてや鳴

11 うへしこそ櫻ははなの君なれや天つかすみを衣笠に
せり

水邊梅

花見に嵐山にまかりて往昔龜山法皇の植させた

7 ゆく水にうつろふ岸の梅が枝は彼のはなにも香をや
かすらむ

まひしことをかしこみたてまつりて

月前梅

ざくらばな

8 うめが香のかをらざりせば窓の内にまだかけ寒き月

見山花

12 萬世のたまものなれやかめの尾のやまにむかへる山

13 足がらの八重山ざくら咲しより不盡の嶺をだにかへ

り見もせず

隣家の櫻のちるのを見て

14 散はなはぬしだにえしもとめぬを餘所にこゝろを

なにくだくらん

山田苗代

15 なはくちし去年のしゝ垣ゆひそへてなはしろいそぐ

賤が小山田

三月三日桃花にそへて人におくる

16 あひにあふひなのまがきの桃のはなもゝ千のはるを

かけて手をりき

春曙鴈

17 花鳥のいろ音かすめる明ばのにかへり見もせて鴈の

ゆくらん

瀧邊藤

18 落たぎつながらてはやく行春をせきとめがほにかゝ

るふちなみ

暮 春

19 すがのねのながき春日とたのみしもあはれ小蝶のゆ

めのひとゝき

夏 歌

賀茂の名所をわかつてうたよみけるととき山森を

20 山もりの杜のした草かりはらひか垣いはふ卯月來

にけり

四月はじめつかた郭公の鳴よし貴船より人のい

ひおこせたるに

21 世にはまだしらぬはつ音をほにあげてなくか貴ぶね

の山ほどゝぎす

耳とほくなりて後子規きゝしと人のいふに

22 みゝうとくなりにし老はほどゝぎす聞つときくぞ初

音なりける

雨中郭公

23 ほとゝぎすつゝみはるかに聞ゆなりすみだがはらの

あめのゆふぐれ

奈良にまかりし時猿澤の池にて

24 青柳のかげにたま藻もなびきあひてさゝ浪すゞしさ
る澤のいけ

早苗うゑわたしたるところそぼつたてり

25 少女子がいかにかけゝるこひぢよりたもとそぼつの
身とはなりけん

輕羅小扇撲流螢

26 をとめ子が扇のかぜになびきつゝ中くたくゆく
ほたるかな

鵜河螢

27 鵜船さす瀬々のほたるもかゞり火もやみを夜よしと
てらす山かけ

瞿麥帶露

28 枝たわに見ゆるものから撫子のはなにむすべるつゆ
はゝらはじ

月前水鶏

29 夜もすがらたゞくくひなは柴の戸につきおもしろく
させばなりけり

山夏月

30 まかで見る光もすゞし玉だれの小簾の外山の夏夜月
夏月透竹

31 緑そふまがきのたけのしげみよりかぜの見せたる月
の涼しさ

夏臥北窓風枕席如涼秋

32 夢さむる手まくらすゞし書机のちりふきはらふまど
のゆふかぜ

納涼

33 いかにたへいかに凌んなつの日のくれてもおなじあ
つきなりせば

六月ばかりの隅田川にて

34 ふた國の中ゆく川に舟うけて夏をわすれしことはわ
すれじ

秋歌

社頭立秋

35 きのふだに夏をわすれて御被せしならの小河にあきは來にけり

野外七夕

36 棚ばたや影うつすらん逢事はかた野の御野の天川水
荻聲驚夢

37 見しゆめのさむる枕にきけばまたおどろくほどのをぎのこゑかは

甲斐權守にてありし比鹿の鳴を聞て

38 秋さればなれもわが名をよびがほにかひよと山のしかぞ鳴なる

秋夕雨

39 わびしくも降くるあめか月まてばかつはなぐさむあきのゆふべに

秋曉

40 あきよたゞ夕はものに紛れても手枕しめるあかつき

の空

鹿嶋社に詣けるをりしも八月十五夜なるに船にてつきを見て

41 富士つくばあらそひたてる東路のとねのかは瀬に月を見るかな

海邊月

42 來て見れば須磨もあかしも秋夜のつきよりおへる名にこそ有けれ

古郷月

43 ふるさとの軒もる月はあきごとに住あらしてぞすみまさりける

月下酌酒

44 さかづきにうかべる影はのみしかどなほ大空に月のこれり

社頭月

45 賢樹葉にかけし神代のます鏡いやますくにする月かな

月前薄

46 あかなくて更行夜はの月かけを尾ばなが袖につゝみてしがな

丹波にくだりて九月十三日夜の月を見て

47 入をのみかこち馴にし谷波路のやまのこなたに月を見るかなな

難波に下り月見んとて河尻より舟うけしにいさ

ゝか空のくもりければ

48 わたつみのかざしの玉をうす衣につゝむに似たる波

の上の月

月欲入

49 山端はよしにげぬともいかにせんしのゝめ近き秋夜のつき

名所擣衣

50 あきしのや外山の月を夜よしともしらでや賤は衣うつらむ

家の紅葉さかりなる比ある殿のふりはへたまへ

るに

51 君がとふこゝろのいろにくらぶれば千入もあきし庭のみみぢ葉

水邊菊

52 あきごとに千世の契をむすぶ手の雫も薫るきくのした水

暮秋菊

53 仙人のをりかざすてふ花のみや暮行秋をよそにきくらむ

冬歌

夜時雨

54 かみな月しぐるゝ夜半のさむけきやすき間のかぜもぬれて吹らん

落葉色深

55 小倉山いまひとしほの秋のいろはちりても見つる木々の紅葉

風前落葉

56 吾岡の樹々のもみち葉吹みだしあらしもいろにいつ
るころかな

殘菊を折て人に

57 見よや君うつろふ色はむらさきのひととひ來ぬ宿
のしら菊

寒草霜

58 野べ見れば萩も尾花もおしなべてしものおきな草
となりనికి

冬月

59 すぎがてに誰ながめけんことの音も月にさえたる木
枯のやど

山家初雪

60 どふひとつもあらしの庭に降そめて雪も友まつ深山べ
のさと

遠山雪

61 むさし野に山端なしと見し人に見せばや雪のちゝぶ

賀茂季鷹和歌集

甲斐が嶺

貴布禰の社に侍りける比雪のいたう降ける夜
62 軒近きかけひの水はおとたえてゆきに聲ある夜半の
山ざと

老人惜年

63 老らくも心をかへて春またばなか／＼としや暮がて
なまし

戀歌

忍戀

64 山しろのとはにおもへどみちのくのいはでしのぶは
くるしかりけり

待空戀

65 中々にたのめざりせば烏玉のゆめには人にあはまし
ものを

相思

66 妹とわれいづらやまさるおもひ川いざおりたちて深

さくらべん

恨戀

67 大淀の松はつれなき色としもしらでかけゝる年波ぞ

うき

秋戀

68 野分してをす吹あげし風よりも見し面かけや身には

しみけん

老後戀

69 おいぞうきあなあやにくに見初めてし面かけのみは

物わすれせで

後朝恨戀

70 歸り來ておもへばつらし鳥が音をまらがほなりしけ

さの別路

雜歌

富士

71 あづま路の行かひごとに富士の嶺は見しめにも似ず

驚かれつゝ

朝山

72 あさげたく麓のけぶりたちそひて雲もわかれぬ遠の

山端

山家垣

73 おのづからかきほをなしつ山ざとの窓のくれ竹軒の

椎柴

山家猿

74 いほしめてたれか聞らんおくやまにあはれましらの

夕暮のこゑ

山家經年

75 花をめで紅葉にそむる心こそすてし浮世のなごり也

けれ

東山なる西行庵の碑に

76 はなぐはし櫻しなくば在て世にをしからぬ身を惜ま

ゝしやは

77 秋ごとに心をそむるもみち葉のにしきやつひのほど

しなるらん

嵯峨の臨川寺に終日あそびて

78 幾世しもあらじ我世をおなじくはかゝるところに盡してしかな

龜

79 泥に尾をひくかめのこゝろをばこゝろとなさば命長けむ

浦に鶴の打むれたるかた

80 芦若のうらわのたづのうらとけてゆたにあそぶや千世の友どち

蒲萄の書に

81 うらやまし千々のねがひの一つだになることかたき身さへある世に

義家朝臣のなこそ關のかたかけるに

82 千萬のあたに對へるものゝふもはなさそふ風はすべなかりけり

范蠡が魚腹さきてみそか書こむるかた

賀茂季鷹和歌集

83 魚のはらさきしのみかは身をも亦粉にくだきてぞことはなしける

富小路殿より猫子たびしに

84 雲のうへ近く生れしねこの子はちをはなちてぞおくべかりける

はたち計の頃より東に下りて住けるに人やりならぬ事ありて賀茂に歸るに千蔭春海躬絃などを
はじめ人々別れをしみてひと日馬のはなむけし
ける時羈中山といふ題をさぐりて

85 東路もみやこの空も戀しきはふた子の山をゆけば也けり

旅行友

86 いづこよりいづことゝふをよすがにてやがてなれぬ
る旅のともかな

旅宿

87 けふもまた不盡の裾野に行くれぬ明日もかくてや草まくらせん

杖

88 つら杖ぞ先つかれけるいそのかみふるきすがたのか
はり行世は

書

89 見るまゝに心くまなくなりけりふりぬるふみや鏡
なるらん

正述心緒

90 よしや名はなりもならずも花をめで月にあくがれて
吾世盡さむ

有栖川宮にて述懐といふ御題を賜はりて

91 言の葉は竹の園生に分いれど世にとゞむべき一ふし
もなし

寄道述懐

92 いかなれば言の葉草に位山高きいやしき品をわくら
ん

曉に寢覺て思ひつゝけたる

93 聞しこと見し事さらにおもひ出る老の寢ざめもかつ

はたのしき

夫木抄をたゞしける時釋教のうた多かるにおも
ひつゝけし

94 日のいづる國にうまれて月の入るかたへはゆかぬわ
がこゝろかな

社頭にて琴彈を聞て

95 神山のみねのまつかぜしらべあひてことの外なる音
をも聞哉

陸奥國人の五十賀に

96 契おきて榮ゆく末のまつ山は千とせの波もこえぬべ
ら也

歌仙堂造り終て人々つどへて歌よみける時

97 はなのくもゝみちのにしき萬代にたち榮ゆべきけふ
の圓ぬか

近衛殿の御會に池岸有松鶴といふ事を

98 きしの松汀のたづの八千歳を君にとよする池のさゞ

波

國

99 千五百あき瑞穂の國を安くにとしづめましてし神の
たふとさ

御阿禮百首予故人雲錦翁所詠歌也頃囑直兄縣主與尙
監以爲一冊予甚愜於素情公務之暇自録數本以贈同好
亦閑中一樂也

天保丙申小春書于大坂鎮城官舎

袁我
廼屋

慣義

明遠堂藏版（朱印）

嘉永二己酉年十一月新觸

製本所 江戸本石町十軒店

發行書肆 英屋 大助

大阪心齋橋北久太郎町

河内屋喜兵衛

（編者藏本による）

賀茂季鷹和歌集

○閑室漫錄四（三八八頁） 百家隨筆第一所收

巖 龜

よろづ代のすみかはこゝと動きなきいはねをしめて
遊ぶ龜かも

初春鶴

初春の耳あらために先きかんあした長閑きあしたづ
の聲

われもまたいざこととはん都鳥すみだ川原になつは
なしやと